誦詩清夜五臺(三)賓。詩を誦す清夜五臺の賓。

相思雖覺鐘聲近。相思、鐘聲の近きを覺ゆと雖も、

猶隔城東十丈塵。猶は隔つ城東十丈の塵。

み、夏仍ほ飛雪、五峰聳出して、蓍艸の頂に五髻あるに象る」と見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、懷德の傳記等は不詳。

【詩意】風に雨に春を過ぎ盡さしむるを愁ふる折から、上人が態態社中の人の近況を問はれたのは、まことに辱い。上人の牀頭に敷ける毛氈は、青山と共に舊いものであるが、門外を過ぐる車は、日に隨つて新に、來訪者は、引きも切らぬ有樣。上人は、三竺諸寺の空林に住む若僧輩に向つて、説法を爲し、清夜、五臺から遠く來た佳賓として、詩を口ずさまれる。相思の餘、君の居る寺の鐘聲、太だ近く、お目にかかるのは造作もない樣であるが、實は、城東十丈の塵を隔て、さう直ぐといふ譯に行き兼ねるのは、まことに殘念である。

北に在つて中天竺寺といひ、ともに隋朝の建立、三は北高峰麓に在つて下天竺寺といひ、吳越の建立である。【三】五臺 華嚴經疏に「清涼山は、即ち雁門郡の五臺山、歲に堅氷を積

寄海昌李使君 海昌の李使君に寄す

海上波濤夜不驚。海上の波濤、夜、驚かす、

使君雖老尚能兵。使君老いたりと雖も、尚は兵を能くす。

荒煙白鹵(一)家家竈(二)。荒煙白鹵、家家の竈、

落日黃岡(三)處處營。落日黃岡、處處の營。

人雜島夷爭小市。人は島夷に雜つて、小市を爭ひ、

潮隨山雨入孤城。潮は山雨に隨つて孤城に入る。

明朝硤石(四)山頭路。明朝、硤石山頭の路、

我欲停車聽頌聲。われ車を停めて頌聲を聽かむと欲す。

【字解】【一】白鹵 禹貢に「兒、澤と爲す、その地に于けるや、鹹鹵と爲す」とあつて、その注に「鹹土なり」とある。【二】家家竈 竈は潮を煮るに用ふ。宋史食貨志に「凡そ鹽を鬻ぐの地を亭場といひ、民を亭戶といひ、或は之を竈戶といふ」とある。【三】黃岡 地名、杭州府志に「黃山・黃陀山、皆、海寧縣治の東に在り、又、黃浦澤あり」と見ゆ。二山、いづれだか分からない。【四】硤石 前に卷四に其地の詩が出て居る。

【題義】前に送李使君鎭海昌の七律があつて、この詩は、即ち其後寄懷したのであらう。

【詩意】海上の波濤、夜も驚かす、君は、年を召されて居るが、善く兵を用ひらるるに因り、亂民ども は、全く慴伏して、騷ぎ立てぬものと見える。海昌の地たるや、白い鹹土に、すさまじき煙が低く這うて、家家に鹽を煮る竈を備へ、夕日の斜に落つる黃岡の邊には、處處に兵營が立ち連ねてある。その地の住民は、島夷と共に、爭つて、小さき市場に入り、潮は山雨に隨つて、孤城に推し寄せる。かくの如き邊僻の地であるが、君が其處を鎭撫して居ればこそ、至極穩に治まつて居るので、明日

われは、硤石嶺の路に車を停めて、人民の歌頌の聲を聞かうと思つて居る。

【餘論】頌聲、州に遍きを事實とすれば、この詩は、使君の德を讚稱したものであるが、萬一、まだ事實でなければ、かくあれかしと囑望したので、いづれにしても、贈言、その體を得たものである。但し、詩中の精彩たる後聯は、前に見えた送李使君鎭海昌の前聯、人雜島夷爭午市、潮隨山雨入秋城と唯だ二字を異にするだけで、まさか、この儘つづけて使君に見せた譯でもなく、いづれか、その一であらうと思はれ、その他の一は、假りに作り上げて、稿を人に示さず、他日改竄する積りであつたらうが、編輯者が容捨なく引き出して、竝に揭げたから、作者の名譽を毀損する樣に成つたのであらう。金檀は「按ずるに、この一聯、前の送李使君に重なり、止だ二字を易ふるのみ。その詞、複するを疑ふ。或は卽ち當日稿を易ふるも、亦た未だ定むべからず。後の梅花の詩、亦た然り」といつて居る。

次韻金文學送弟往海上

金文學の弟を送りて海上に往くに次韻す

（一）小陸賢如大陸賢。小陸の賢は、大陸の賢の如く、

亂離爲客最堪憐。亂離客となつて、最も憐むに堪へたり。

【字解】【一】小陸賢如大陸賢　晉書陸雲傳に「少にして、機と名を齊しうす、文章、機に及ばずと雖も、しかも、持論、これに過ぐ、號して二陸といふ」とある。【二】横經　經書を攜へ行く。【三】虛席　席は講席。【四】麥氣　麥が熟して自然に香氣を發すること。王安石の詩に晴日薫風、麥氣」とある。【五】蘹香　本草に「蘹香は、北人呼んで茴香と爲す、蘹香は宿根、深冬苗を生じ、五六月、花を開いて子を結ぶ、大、麥粒の如く、輕くして細稜あり」と見ゆ。【六】夢斷生芳草　前に卷十二、答宗人廉の詩中にも引いたが、南史謝方明傳に「子惠連、年十歲、能く文を屬す、族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、篇章ある每に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得、と。かつて、永嘉の西堂に於て詩を思ふ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見、卽ち池塘生春草を得、大に以て工と爲す」とある。【七】練川　松江志に「章練塘は靑浦縣澱西市鎭」とある。

（二）横經海上知（三）虛席。經を横へて海上、席を虛しうするを知り、

打鼓津頭看發船。鼓を打つて、津頭、船を發するを看る。

（四）麥氣曉晴田雉鬭。麥氣、曉に晴れて田雉鬭ひ、

（五）蘹香春暖野鶖眠。蘹香、春暖にして野鶖眠る。

明朝（六）夢斷生芳草。明朝、夢斷えて芳草を生ず、

風雨孤舟過（七）練川。風雨、孤舟、練川を過ぐ。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】君の家の兄弟は、當年の陸機・陸雲と同じで、ともに名を齊しうして居るが、この亂離の世に逢うて、客寓して居るのは、まことに、お氣の毒な始末。今や、君は經書を攜へて、海邊に往かれるから、學校の講席は休みにする外なく、やがて、津頭に鼓を打てば、舟が愈よ發程する。今しも、春

の末、麥氣曉に晴れて、田雉相鬭ひ、蘹香、苗を生じて春暖かな處に、鵝鳥が眠つて居る。明日、夢醒めて、弟と一處に居る御蔭で、芳草を生ずといふ名句を得ることあるべく、その時は、風雨の中に、孤舟は、早くも、練塘を過ぎて居るであらう。

【餘論】　後聯は、例の敍景の佳語である。

過海昌贈使君李兼鎭禦　　海昌を過ぎて使君李兼鎭禦に贈る

海上觀風逐使車。　海上、風を觀て使車を逐ふ、
將軍雙廟有遺墟。　將軍の雙廟、遺墟あり。
已看田父迎貓虎。　すでに看る、田父の貓虎を迎ふるを、
未遣溪人射鱷魚。　未だ溪人をして鱷魚を射せしめず。
日出鹽生沙地白。　日出で鹽は生じて沙地白く、
潮來波動縣城虛。　潮來り波動いて縣城虛し。
故人相識登樓意。　故人相識る、登樓の意、
不是懷歸畏簡書。　これ歸るを懷うて、簡書を畏るるならず。

【字解】【一】觀風　風俗を觀る。【二】使車　李使君の車。【三】將軍雙廟　張巡許遠の廟を云ふ、前に卷三、雙廟の題義に詳述して置いた。【四】迎貓虎　禮記に「貓を迎ふるは、その田鼠を食ふが爲めなり。虎を迎ふるは、その田豕を迎ふるが爲めなり」とある。【五】畏簡書　簡書は公文、更に遠方へでも移されるかと思つて、竊に懼るる意。

【題義】　この詩は、青邱が吳越に游んだ時、海昌を過ぎて、李使君に贈つたので、これで見ると、その名は兼といふのであらう。

【詩意】　われは、海邊の風俗を觀むが爲に、君の車を逐うて、ここに來り、取り敢へず、張巡・許遠、二將軍の雙廟の遺址を尋ねた。今しも春で、田父は貓や虎を迎ふる祭を爲して居るが、まだ溪中の居民をして、鱷魚狩を爲さしめる樣には成らない。日が出ると、鹽は自然に凝結して、沙地一帶が白くなり、潮が來ると、波が動いて、人の居ない縣城に推し寄せる。われは、舊知の故を以て、君の樓に登られる其意を知つて居るので、それは、決して、早く鄉里に還りたい、そして、公文を以て、更に遠くに移されては困まるなどいふ了見の爲めではなく、專ら其職を守つて、防禦に力めて居るからで、流石に、君は、公私輕重の別を知つて居る大丈夫である。

送黃僧母入道　　黃僧の母の入道を送る

江夏千年有故家。　江夏千年、故家あり、
至今喬木哺慈鴉。　今に至つて、喬木、慈鴉を哺す。

【字解】【一】江夏　後漢書黃香傳に「天下無雙、江夏黃童」とあつて、この人は二十四孝の一人である。

里聞賢子(四)初名憲。　里には聞く、賢子、初名は憲、
世說仙姑(五)舊姓麻。　世には說く、仙姑、舊姓は麻。
壽酒淋漓傾墮露。　壽酒淋漓、墮露を傾け、
舞衣零亂拂飛霞。　舞衣零亂、飛霞を拂ふ。
不須(六)三釜稱榮食。　須ひず、三釜、榮食と稱するを、
自有金盤(七)棗似瓜。　自ら金盤、棗の瓜に似たるあり。

【二】故家　卽ち舊家。【三】哺慈鵶　禽經に「慈烏反哺」とある。【四】初名憲　後漢書黃憲傳に「字は叔度、汝南愼陽の人なり、世〻貧賤、父、牛醫たり、憲、はじめ、孝廉に擧げられ、又公府に辟さる、友人、その仕を勸む、憲、亦た之を拒まず、しばらく京師に到つて還る、天下號して徵君といふ」とある。【五】舊姓麻　麻姑は仙女の名、前に卷九、蔡經宅の題識に引いたが、神仙傳に「因つて、人を遣して麻姑を召す、すでに至る。從官、王遠に半す。蔡經、亦た家を擧げて之を見る。これ、好女子、年十八九ばかり、頂上に於て髻を作り、餘髮散垂して腰に至る。衣に文采あり、又錦綺に非ず、光彩目に耀いて、名狀すべからず、入つて遠を拜す。遠、これが爲に起坐す。坐定まつて、各〻行廚を進む」とある。【六】三釜　莊子に「曾子、再び仕へて心再び化す、曰く、吾、はじめ、親に及びて仕ふ、三釜にして心樂む、後、仕へて三千鍾、洎ばずして吾が心悲む」とあつて、極めて少量の俸祿を云ふ。【七】棗似瓜　前に卷四、侍君白玉巵の詩中にも引いたが、漢書郊祀志に「李少君曰く、臣、かつて海上に游びて、安期生を見る、安期生、臣に棗を食はしむ、大さ瓜の如し」とある。

【題義】この詩は、黃氏の僧の母たる人が、世事を謝して尼になるのを送つたのである。黃僧の名字等は不詳。

【詩意】黃氏は、江夏に居て、千年を經た舊家であつて、世世、孝を以て聞こえ、烏までが、その眞似をして、今に至るも、喬木の上で、子烏は、親に反哺をして居る。御令息は、かの黃憲と同じく、非常に評判の善かつた人、そして、貴女は、古しへの仙女麻姑に類して居る。今、入道の式を擧ぐるに際し、壽酒は淋漓として、天より墮つる露を傾くるが如く、舞衣は零亂して、飛ぶ夕やけ雲を拂ふ樣である。區區として、三釜の俸祿を榮食と稱して有り難がるにも及ばず、すでに入道せし後は、金盤の上に、かの安期生が薦めたといふ瓜ほど大きな棗を盛つて、常に食べられることであらう。

答薊邱聶才子　薊邱の聶才子に答ふ

聞道詩狂(一)復酒狂。　聞くならく、詩狂、復た酒狂、
少年鞍馬鬬輕裝(二)。　少年、鞍馬、輕裝を鬬はす。
百金已醉名姬(三)館。　百金、すでに醉ふ名姬の館、
一劍還登俠士堂。　一劍、還た登る俠士の堂。
烏起夜啼吳苑月。　烏起つて、夜啼く、吳苑の月、
雁來秋帶薊門(四)霜。　雁來つて、秋帶ぶ、薊門の霜。
亂餘零落無人識。　亂餘零落、人の識るなし、

【字解】【一】詩狂復酒狂　詩酒の狂。
【二】輕裝　身輕な裝束。
【三】名姬　名妓に同じ。
【四】薊門　題職を見よ。

日暮相逢向路傍。　日暮相逢うて、路傍に向ふ。

【題義】一統志に「薊邱は、順天府舊燕城の西に在り、卽ち古しへの薊門なり」とあつて、元の都、今の北平、璽才子の名字は不詳。

【詩意】承はれば、君は詩酒狂を縱にし、少年の頃、身輕な妝束を爲し、そして、馬に乘つて、心のままに游び歩いたとの話。百金を投じては、すでに名妓の館に醉ひ、一劍を攜へては、又俠客の家を訪ひなどして居る。わが居る處は、烏が塒より起つて、夜、吳苑の月に呼び、君の居る方は、雁が飛んで來て、秋、薊門の霜を帶びて居る。兩地、ともに亂後甚だ荒涼、お互に零落して、誰も識別して呉れるものもない位。これでは、大道を濶歩する譯にも行かず、日暮、相逢ふとも、路傍に向つて名のり合ふ外はあるまいと思ふ。

廉上人水竹居

廉上人の水竹居

(一)水西分土(二)一袈裟。　水西、土を分つ一袈裟、

(三)拄杖敲門竹滿家。　杖を拄へて門を敲けば、竹、家に滿つ。

掃石安禪無落葉。　石を掃うて禪に安んずれば、落葉なく、

(四)過溪送客有(五)浮槎。　溪を過ぎて客を送れば、浮槎あり。

龍吟夜應潮生海。　龍吟、夜、應じて、潮、海に生じ、

鳥過寒驚月在沙。　鳥過ぎて、寒、驚く、月、沙に在るを。

林下本來參(六)玉版。　林下、本來、玉版に參す、

不須更煮(七)趙州茶。　須ひず、更に煮る趙州の茶。

【字解】【一】水西　寺の名、嘉興府志に「賞聖禪寺、一名水西、祥符寺と竝に黃檗運の開山、相傳へて、唐の宣宗潛邸の所と爲す」とある。【二】一袈裟　一枚の袈裟を鋪く程の極めて狹い土地。【三】拄杖　杖を支へる。【四】過溪送客　廬山記に「慧遠法師、客を送つて虎溪を過ぐれば、虎、輒ち鳴號す。陶元亮・陸靜修を送り、與に語つて道合し、覺えず、送つて虎溪を過ぐ、因つて大笑す、世、三笑の圖を傳ふ」とある。【五】浮槎　槎は木片。【六】玉版　筍を云ふ。冷齋夜話に「子瞻、劉器之を邀へて、玉版和尚に參せむとし、簾景寺に至り、筍を燒いて之を食ふ。器之、筍の殊に勝れたるを覺え、何と名づくかと問ふ。子瞻曰く、玉版なり、この老師、善く法を說く、君をして、禪悅の味を得せしむるを要するのみ、と。器之、はじめて、その戲を悟る」とある。【七】趙州茶　五燈會元に「僧、谷泉禪師に問うて曰く、未だ審にせず、客來らば何を將て祇待せむ。師曰く、雲門の糊餅、趙州の茶」とある。

【題義】この詩は、廉上人の住菴たる水竹居に題したのである。但し、上人の名字等は不詳。

【詩意】水西寺の境内に、一袈裟地ほどの狹い處を分つて貰つて、菴室を構へられ、試に訪問して、杖を支へつつ門を敲くと、敷地には、竹が一ぱいである。石を掃うて、安らかに坐禪をしやうといふので、落葉一つも留めず、客を送つて、覺えず溪を過ぎると、木ぎれが流れて居る。龍の吟ずる聲が夜の靜けさに反響して、潮は海中より推し寄せ、鳥が飛ぶ程の寒さに驚いて、起つて見ると、月は汀

上の沙を照らして居る。われとても、すでに林下に來た上は、必然的に、筍でも食つて禪悅の至味を領すべく、何も、この上、趙州の茶を煮て接待を煩はすにも及ばぬことである。

梅花九首

梅花　九首

瓊(一)姿只合在瑤臺(二)。　瓊姿、只だ合に瑤臺に在るべし、

誰向江南處處栽。　誰か江南に向つて處處に栽う。

雪滿山中高士(三)臥。　雪は山中に滿ちて高士臥し、

月明林下美(四)人來。　月は林下に明かにして美人來る。

寒依疏(五)影蕭蕭竹。　寒は疏影に依る、蕭蕭の竹、

春掩殘香漠漠苔。　春は殘香を掩ふ、漠漠の苔。

自去何(六)郎無好詠。　何郎を去らしめてより好詠なく、

東風愁寂幾回開。　東風愁寂、幾回か開く。

【字解】【一】瓊姿　玲瓏たる玉の樣な姿。【二】瑤臺　仙宮。【三】高士臥　後漢書袁安傳に「時に、大雪地に積むこと丈餘。洛陽の令、身づから出でて按行す。安の門に至れば、行路あるなし。人をして戸に入らしむれば、安の僵臥するを見る。問ふ、何を以て出でざると。安曰く、大雪、人皆餓ゑ、人に干むるに宜しからずと。令、以て賢として孝廉に擧ぐ」とある。【四】美人來　前に卷九、題二松雪軒一の詩中にも引いたが、龍城錄に「隋の趙師雄、羅浮に遷り、日暮、車を松林の間に憩ふ。酒肆の傍舍、一女人を見る。淡妝素服、出でて迓ふ。時、すでに昏黑、殘雪、月色に對して微明。師雄、これを喜び、これと語る。芳香人を襲ふ、因つて、與に酒家の門を叩き、相與に飲む。しばらくして、一綠衣の童來るあり、笑歌戲舞、亦た自ら觀るべし。師雄、醉うて寢ぬ。これに久しくして、東方すでに白し、起つて觀れば、乃ち大梅花樹下に在り、上に翠羽あり、啾嘈相顧ち、月落ち參橫はり、但だ惆悵するのみ」とある。【五】疏影　梅の枝の影。【六】何郎　前に次二韻西園公詠一梅の第二首、揚州何官の項に詳說して置いた。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】梅花の姿たるや、玲瓏玉の如く、元と仙宮に在るべきものであるのに、誰が之を移して江南處處の地に植ゑたのであるか。雪の山中に滿ちたる時、この花あらば、さながら高士の臥するが如く、月の林下に明かなる處、この花あらば、彷彿として、美人の來れるを疑ふばかり。竹は蕭蕭として、寒げに、その疏影に倚り添ひ、苔は漠漠として、春、その名殘の香を掩ひ藏して居る。さはれ、揚州の東閣に於て留賞せし何遜その人、一たび逝きし後は、世上復た好詠あるを聞かず、東風愁を帶びて寂しきに拘はらず、梅花は幾たび開いたか。

【餘論】雪滿、月明の十四字は、梅花を詠じたる名聯として、林逋の疏影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏と並稱することに就いては、誰も異論なく、爾後、これに超乘して上るものは絕無である。

縞(一)袂相逢半(二)是仙。　縞袂相逢ふ、半は是れ仙、

平生水竹有深緣。　平生、水竹、深緣あり。

【字解】【一】縞袂　白い袂、白衣の美人、梅を形容して云ふ、東坡の詩に月黑林間逢二縞袂一とある。

將疏尙密微經雨。　將に疏ならむとして尙ほ密、微に雨を經、
似暗還明遠在煙。　暗きに似て還た明かに、遠く煙に在り。
(三)薄暝山家松樹下。　薄暝山家、松樹の下、
嫩寒江店杏花(四)前。　嫩寒江店、杏花の前。
秦人若解當時種。　秦人若し當時に種うるを解すれば、
不引漁郞入洞(五)天。　漁郞を引いて洞天に入れず。

【二】半是仙　仙人に近いといふ義。【三】薄暝　暝は暮色。【四】杏花前　杏花の前面ではなく、杏花の咲くより前といふ義。【五】洞天　即ち桃源。

【詩意】梅花を見ると、さながら仙人に近い白衣の美人に遇うた樣であつて、その特質として、水竹と深い緣故があつて、大抵、相離れない。梅花の將に疏ならむとして尙ほ密なるは、すこしく雨を帶びて疊合して居るからであるし、暗きに似て却つて尙ほ明るきは、遠く煙中に在つて相映じて居るからである。暮色ほのかなる山家松樹の下、薄ら寒き江店に杏花の咲き出づる前、いづれも、その處といひ、その時といひ、梅花あるに相應しい。もし、桃源に隱れた秦人が、その當時、これを種ゑることを解したならば、漁郞を引いて、洞天に入ることなく、長しへに、絕境として全く此世と懸絕して居たであらう。つまり、桃花は、紅くて目につき易いから、ああいふことに成つたので、梅花ならば、唯だ白雲として、見逃がされて仕舞つたに相違ない。

(一)翠羽驚飛別樹頭。　翠羽驚き飛ぶ別樹の頭、
冷香狼藉倩(二)誰收。　冷香狼藉、誰を倩うて收めむ。
(三)騎驢客醉風吹帽。　驢に騎するの客は醉うて、風、帽を吹き、
(四)放鶴人歸雪滿舟。　鶴を放つの人は歸つて、雪、舟に滿つ。
淡月微雲皆似夢。　淡月微雲、皆夢に似たり、
空山流水獨成愁。　空山流水、獨り愁を成す。
幾看孤影低徊處。　幾たびか孤影を看て低徊する處、
只道花神夜出游。　只だ道ふ、花神夜出でて游ぶと。

【字解】【一】翠羽　うぐひす。前に第一首、月明林下美人來の項に引いたが、龍城錄に「師雄、醉うて寢ぬ。これに久しくして、東方、すでに白し。起つて視れば、乃ち大梅樹下に在り、上に翠羽あり、啾哳相須ち、月落ち、參橫はり、但だ惆悵するのみ」とある。【二】倩誰　倩はやとふと訓すべし。【三】騎驢客　東坡の詩に、雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山とある。【四】放鶴人　前に卷九、和三衍上人觀梅の詩中に引いたが、詩話總龜に「林逋、武林の西湖に隱る。娶らず、子なし、居るところ、多く梅を植ゑ、鶴を畜ひ、舟を湖中に泛べ、客至れば、鶴を放つて之を致す、因つて、梅妻鶴子と謂ふと云ふ」とある。

【詩意】鶯が一羽、他の木の上から驚いて飛び起つたが、それは、梅花の冷香が狼藉として散漫して居るからである。驢馬に騎つた孟浩然の樣な客は、この花を賞して醉ひ、風が帽を吹いても、知らぬかの如くであるし、鶴を放つ林逋の如き人が、この花を看て歸らうとすると、その間に雪が舟に一ぱい積つて居た。夜になつて、淡月微雲の間に在るときは、一白茫茫として夢の如く、空山流水の畔

に獨り立つを見ると、獨り愁に堪へられぬ。幾たびか、梅の孤影を看て低徊し、花神が夜出でて遊ぶからといふので、なほ去りがてにして居た。

淡淡霜華(一)溼粉痕(二)。　淡淡たる霜華、粉痕を溼す、
誰施綃帳護香溫。　誰か綃帳を施して、香を護して溫なる。
詩隨十里尋春路。　詩は隨ふ、十里春を尋ぬるの路、
愁在三更挂月村。　愁は三更月を挂くるの村に在り。
飛去只憂雲作伴。　飛び去つて、只だ憂ふ雲を伴と爲すを、
銷來肯信玉爲魂。　銷え來つて、肯て信せむや玉を魂と爲すを。
一尊欲訪羅浮客(三)。　一尊訪はむと欲す、羅浮の客、
落葉空山正掩門。　落葉空山、正に門を掩ふ。

【字解】【一】霜華　霜の地に鋪いて花の如く見ゆるを云ふ。又華は唯だ添へた字と見ても善い。【二】粉痕　おしろいの痕。【三】羅浮客　羅浮は梅の名所で、そこに住む人。或は、趙師雄の如く、羅浮に遊びに來た人としても善い。

【詩意】天、なほ寒き折から、霜華淡淡として、梅花に點ずれば、さながら、おしろいの痕が溼うた樣であつて、誰か薄ぎぬの戸ばりを施し、その香を保護して、すこしく溫かならしむるか。梅花を尋ねて、十里も行くと、その路すがら、詩は、自然に成り、三更の頃、月を挂くる村に、花の咲き匂ふを見れば、まことに愁を消遣し兼ねる。梅花は、雲を以て伴侶として居るが、その往往にして飛び去るのは憂ふべく、その清絕なるは、玉を以て魂として居るが、やがて花の銷え行くを見れば、どうも、それとも信じ兼ねる。ここに、一尊の酒を載せて、羅浮山中の人を尋ねやうと思ふが、無論、春の音づれた氣色もなく、落葉空山に滿ちて、今しも、門を掩うて居るであらう。

雲霧爲屏(一)雪作宮(二)。　雲霧を屏となし、雪を宮と作す、
塵埃無路可能通。　塵埃、路の能く通ずべきなし。
春風未動枝先覺。　春風、未だ動かず、枝、先づ覺り、
夜月初來樹欲空(三)。　夜月初めて來つて、樹空しからむと欲す。
翠袖佳人(四)倚竹下。　翠袖の佳人、竹下に倚り、
白衣宰相(五)住山中。　白衣の宰相、山中に住す。
寂寥此地君休怨。　寂寥、この地、君、怨むを休めよ、
回首名園盡棘叢(六)。　首を回らせば、名園、盡く棘叢。

【字解】【一】爲屏　屏は屏風。【二】宮　住所、必ずしも立派な宮殿でなくとも云ふので、禮記に「儒に一畝の宮あり」と見えて居る。【三】樹欲空　玲瓏一白であるから、木に花も何も無い樣に見える。【四】翠袖佳人　前に次韻西園公詠梅の詩中にも引いたが、杜甫の詩に天寒翠袖薄、日暮倚修竹とある。【五】白衣宰相　唐書令狐綯傳に「綯の子滈、當時、これを白衣宰相といふ」とある、稗史に「魏野、亦た白衣宰相と

帶す」とあり、談苑に「王曾、布衣の時、梅花の詩を以て呂蒙正に獻じて云ふ、而今未レ問和羹事、且向二百花頭上一開。蒙正曰く、この生、すでに狀元宰相を安排するなり」とあつて、必ずしも、一に限つた譯でもない。【六】棘叢　荊棘の叢。

【詩意】梅花の在る處を見ると、雲霧を以て屏風となし、雪を以て宮室となせるが如く、浮世の塵埃とは、丸で隔離して、その間、通ずべき路だに無い樣である。春風、未だ動かざるに、南枝は先づそれと感づき、夜月初めて來るとき、玲瓏一白、樹には何も著けぬ樣である。その品格の淸高なるは、翠袖の佳人、竹下に倚るが如く、白衣の宰相、山中に住むが如くである。梅花は、毎毎、寂しげな地に居るが、これを不滿に思ふ必要もなく、首を回らせば、名園と稱せられし處も、荒廢して、盡く荊棘の叢と成つて居る位である。

夢斷揚州(一)閣(二)掩レ塵。　夢は斷えて、揚州、閣、塵を掩ふ、

幽期猶自屬二詩人一。　幽期、猶ほ自ら詩人に屬す。

立殘(三)孤影長過レ夜。　立殘の孤影、長く夜を過ぎ、

看到二餘芳一不二是春一。　看て餘芳に到つて、是れ春ならず。

雲暖空山栽(四)レ玉遍。　雲は暖に、空山、玉を栽うること遍く、

月寒深浦泣(五)レ珠頻。　月は寒くして、深浦珠に泣くこと頻りなり。

撅(六)レ篷圖裏當時見。　篷を撅ぐるの圖裏、當時見る、

錯愛二橫(七)斜一却未レ眞。　錯つて橫斜を愛するは、却つて未だ眞ならず。

【字解】【一】揚州　前に次二韻西園公詠レ梅の第二首、揚州回首の項に詳說して置いた。【二】閣　東閣、同上。【三】立殘　殘は盡す、立ち盡す、いつまでも立つて居る。【四】栽玉　楊雍伯が玉を藍田に種ゑて美婦を得たといふ故事に本づく。搜神記に「楊公雍伯、篤孝、父母を無終山に葬る。山高くして水なし、義漿を作つて行人に給すること三年。一人あり、飲み訖り、懷中より石子一升を取り、これを與へて曰く、これを種うれば、美玉を生じ、幷せて、好婦を得む、と。公、これを種う。數歲にして、北平の徐氏、女あり、極めて美、公、これを求む。徐氏云ふ、白璧一雙を得ば婚を爲すべし、と。公、種うるところに至り、白璧五雙を得、以て聘す、遂に妻はすに女を以てす。その地を名づけて玉田と謂ふ」とある。【五】泣珠　前に卷九、美人摘阮の詩中に引いたが、博物志に「鮫人水居、出でて人家に寓して綃を賣り、去るに臨み、主人に從つて、器を索め、泣いて玉を出して盤に滿たしめ、以て主人に與ふ」とある。【六】撅篷圖　畫苑に「宋の楊補之、善く梅を寫す、撅篷の圖あり」と見ゆ。【七】橫斜　林逋の詩に疏影橫斜水淸淺とある。

【詩意】揚州に於て、梅花を賞せしことは、夢と消え、東閣は、塵に掩はれて居るが、幽期は、猶ほ自ら詩人に屬し、詩人は、決して之を忘れず、且つ再游の日を期して居る。梅花の孤影は、立ち盡した儘で、長く夜を過ごし、この花、落ちて後は、他の花を見ても、春らしい心地はせぬ。梅花の滿開の時、雲暖かなれば、空山に一ぱい玉を種ゑて、自然煙るが如く、月寒ければ、深い入江に鮫人が頻りに泣いて、珠を出して居るかと疑はれる。楊補之に撅篷の圖があつて、かつて見たことがあるが、巧に神趣を寫したもので、林逋の如く、唯だ橫斜の疏影のみを賞するのは、却つて、その眞を得たものではない。

獨開無那只依依。　ひとり開いて、那かむともするなく、只だ依依たり、
肯爲愁多減玉輝。　肯て愁多きが爲に玉輝を減せむや。
簾外鐘來初月上。　簾外、鐘來つて初めて月上り、
燈前角斷忽霜飛。　燈前、角斷えて忽ち霜飛ぶ。
行人水驛春全早。　行人水驛、春、全く早く、
啼鳥山塘晚半稀。　啼鳥山塘、晚、半ば稀なり。
愧我素衣今已化。　愧づ我が素衣、今すでに化するを、
相逢遠自洛陽歸。　相逢ふ、遠く洛陽より歸る。

【詩意】梅花一株、ひとり開いて、寂寥の極、物おもはしげに見えるが、決して、愁多きが爲に、白玉の光輝を減ずる樣なことは無い。簾外に鐘の音が聞こえる時しも、その梢には月が上り、燈前に角の聲を聞き止みし頃、その花邊には霜が飛んで居る。旅人の過ぐる水驛には、この花のみ、春に綻ぶこと、最も早く、鳥の啼く山の池の邊、日暮に見ると、まだ半分位しか咲き出さぬ處が、ともに風情に富んで居る。愧づべきは、われ久しく風塵中を走り、白衣も全く黑くなり、頃ろ遠く帝都より歸つて、この梅に逢つたことである。

【字解】【一】依依　おもひ慕ふ貌、情思ある貌。【二】角斷　角はラッパの如きもの。【三】素衣　白衣、無官の人の著る衣。【四】洛陽　帝都の義、陸機の詩に京洛多風塵、素衣化爲緇とあり。

最愛寒多最得陽。　最も寒の多きを愛し、最も陽を得たり、
仙游長在白雲鄉。　仙游、長しへに白雲の鄉に在り。
春愁寂寞天應老。　春愁寂寞、天、應に老ゆるなるべし、
夜色朦朧月亦香。　夜色朦朧、月、亦た香ばし。
楚客不吟江路寂。　楚客、吟せず、江路寂たり、
吳王已醉苑臺荒。　吳王、すでに醉うて苑臺荒る。
枝頭誰見花驚處。　枝頭誰か見む、花驚くの處、
嫋嫋微風簌簌霜。　嫋嫋の微風、簌簌の霜。

【詩意】梅花は、他と異にして、寒の嚴しきことを最も愛すれども、翻つて又陽氣の魁をするもので、每每、白雲の鄉に在つて、仙客の如く游息して居る。春愁は、寂寞として、天も老ゆなるべく、夜色朦朧たる時は、月も亦た香ばしい樣に覺える。屈原は、この花を吟賞しなかつたので、江邊の路を歩く時など、定めて寂しさに堪へざりしなるべく、吳王は、一醉の中に、その國、早く亡び、さしもの

【字解】【一】最得陽　第一番に陽氣を得る、即ち春の魁をする。【二】楚客不吟　屈原が梅の事を一切言つて居らぬ。【三】吳王　夫差を指す、格別、書物には見えぬが、夫差は苑池を營んだから、定めて梅花をも植ゑたであらう。そして一醉の間に國が亡びたといふこと。羅隱の梅花の詩にも吳王醉處十餘里、照野拂衣今正繁とある。【四】簌簌　ざくざくといふ音。

苑臺は、荒廢して仕舞つた。枝頭の花、俄に驚くを訝しく思つたが、それは、嫋嫋たる微風が吹いて過ぎ、簌簌たる嚴霜が降り灑いだ爲めであつた。

(一)斷魂只有月明知。　斷魂、只だ月明の知るあり、
無限春愁在一枝。　無限の春愁、一枝に在り。
不共人言唯獨笑。　人と共に言はず、唯だ獨り笑ひ、
(二)忽疑君到正相思。　忽ち君の到るを疑うて、正に相思ふ。
歌殘別院燒燈夜。　歌は殘す、別院燈を燒くの夜、
(三)妝罷深宮覽鏡時。　妝は罷む、深宮鏡を覽るの時。
舊夢已隨流水遠。　舊夢、すでに流水に隨つて遠く、
山窓聊復伴題詩。　山窓、聊か復た題詩を伴ふ。

【字解】(一)斷魂　心魂を斷つ。(二)忽疑君到　盧仝の詩に相思一夜梅花發、忽到窓前疑是君とあるに本づく。(三)妝罷　金陵志に、「宋の武帝の女壽陽公主、人日、含章殿の簷下に臥す。梅花、額上に落ちて、五出の花を成し、これを拂へども去らず、二日を經て、これを洗へば乃ち落つ、宮女これに效ふ、今、梅花妝と稱す」とあり、韋莊が詩に半掩朱門白日長、晩風輕墮落梅妝とある。

【詩意】梅花を見て斷魂しても、外に人なく、唯だ明月の相知るのみ、しかも、無限の春愁は、その花の一枝の爲に生じたのである。花は、もとより人と共に物いふこと能はざれば、唯だ獨り笑ふのみ、忽ち窓前に向つて、その影を見、わが戀しき人の來たのでは無いかと疑つたが、それは、丁度、その人を思つて居る時であつた。離れた院落に燈火を高く焚やして、いつしか歌の盡きし時、深宮に鏡を覽つつ、美人の妝、恰も畢りし折からなど、梅花があると、一しほの風情を添へるであらう。舊夢は、すでに流水に隨つて遠く、今や、詩を題せむとして、山窓の下に苦吟すると、依然として、梅花と相伴うて居る。

【餘論】第一首の雪滿、月明以外、第三・第四・第五の前聯、第六首の後聯など、ともに摘句の圖に入るべきものである。第八首の前聯、春愁寂寞も、可なり善いが、これは、すでに、次韻西園公詠梅の第二首に見えて居た。且つ、この詩中、寂の字が複して居るので、大全集には、春愁寂寞を落寞に作つてある。第二・第九の兩首は、破題に妙である。なほ、第七首の結末、愧我素衣今已化、相逢遠自洛陽歸の二句を見ると、九首とも、青邱が官を罷めて、南京から歸つた後に作つたことは確かである。

歸吳至楓橋　吳に歸りて楓橋に至る

遙看城郭(一)尙疑非。　遙に城郭を看て、尙は非なるを疑ふ、
不見青山(二)舊塔微。　見ず、青山舊塔の微なるを。
(三)官秩加身應謬得。　官秩、身に加ふるも、應に謬つて得たる「なるべし、」

【字解】(一)尙疑非　さうでは無い樣に思ふ。(二)青山舊塔微　題下の原注に「舊と塔あり、今廢す」とある。(三)官秩　官は官職、秩

郷音到レ耳是眞歸。　郷音、耳に到つて、是れ眞歸。
夕陽寺掩啼烏在。　夕陽の寺は掩うて、啼烏在り、
秋水橋空乳鴨飛。　秋水の橋は空しく、乳鴨飛ぶ。
寄レ語里閭休レ復羨。　語を寄す、里閭復た羨むを休めよ、
錦衣今已作二荷衣一。　錦衣、今すでに荷衣となる。

は等級。【四】寺掩　寺が戸を閉ぢて居る。【五】橋空　橋が無くなつた。【六】乳鴨　雛を哺む家鴨。【七】里閭　里閭に同じ、近郷の里人。【八】荷衣　蓮の葉を衣にする隠者の服。

【題義】楓橋は、數ば見えて、前に卷十四、賦二得寒山寺一の題下にも詳述して置いた。この詩は、青邱が官を罷めて、南京より吳に歸り、楓橋に著せし時に作つたのである。

【詩意】はるかに、蘇州の城郭を望みても、さうで無い樣に疑はれ、青山に近き寒山寺の古い塔の微なるも見えない。さきに、徵に應じて都に入り、官職爵位を加へられたが、もとより、不才の身であつて、謬つて得たに相違なからうが、ここに故鄕の訛が耳に到つて、はじめて、本當に歸つて來たことを自覺した。夕日の寺は、門を閉ぢて、啼く烏の聲のみ聞こえ、秋の川に架け渡せる橋も、今は無くなつて、雛に哺む家鴨が飛んで居る。そこで、里人に寄語するが、決して、われを羨むに及ばず、われは、錦衣を脫ぎ棄てて、隱者の荷衣を著ける積りである。

【餘論】夕陽、秋水の十四字は、例の敍景の佳聯である。

送二徐山人還二蜀山一、兼寄二張靜居一

徐山人の蜀山に還るを送り、兼ねて張靜居に寄す

我因レ解レ紱遠辭レ京。　われは紱を解くに因つて、遠く京を辭し、
君爲レ修レ琴暫入レ城。　君は、琴を修むる爲に、暫く城に入る。
偶爾相逢春酒熟。　偶爾、相逢うて春酒熟し、
飄然忽去暮煙生。　飄然、忽ち去つて暮煙生ず。
山頭學レ嘯猶聞レ響。　山頭、嘯を學んで猶ほ響を聞き、
世上留レ詩不レ寫レ名。　世上、詩を留めて名を寫さず。
西磵煩レ詢二張靜者一。　西磵、張靜者を詢ふを煩はす、
年來註レ易幾爻成。　年來、易を註して、幾爻か成る。

【字解】【一】解紱　印綬を解く。【二】修琴　琴を買ひ調へる、許渾の詩に「賣レ藥修レ琴歸去遲」とある。【三】偶爾　偶然、測らずも。【四】山頭學嘯　晉書阮籍傳に「籍、かつて蘇門山に于て孫登に遇ひ、ともに終古、及び栖神導氣の術を商略す。登、皆應ぜず。因つて、長嘯して退く。半嶺に至つて、その聲、鸞鳳の音の如く、巖谷に響くを聞く」とある。【五】西磵　西の谷、或は地名かも知れぬ。【六】張靜者　靜者は世事を拋棄せし人、杜甫の詩に蔡侯靜者意有レ餘とある。題に見えた張靜居、即ち張羽。【七】幾爻　一卦は六爻より成る、幾卦といふに同じ、易は總數六十四卦。

【題義】徐山人は、例の徐賁。蜀山は地名、蜀中の山ではない。張靜居は、即ち張羽、靜居は、その號かも知れぬ。列朝詩集、徐賁の條には「淮張、閫を開く、辟して屬となす、張羽と俱に避け、去つ

て吳興に之き、張は菁山に居り、徐は蜀山に居り、蜀山精舍を建つ」とあるし、張羽の條には「兵に阻まれて歸るを得ず、因つて、武林に僑し、吳に來り、吳興の山水を喜び、徐賁と約し、居を戴山の東に卜す」とある。この詩は、徐賁に城中に遇ひ、その蜀山に還るを送り、併せて、張羽に寄せたので、詩を見ると、靑邱が南京から歸つた後の作である。

【詩意】われは、印綬を解いて職を辭せしに因つて、京を去つて歸國し、君は、琴を買ひ調へる爲に、しばらく城中に來られたに因つて、料らずも御目にかかつた。恰も春酒の熟する折から、會飮を共にしたが、やがて、君は、飄然として忽ち去り、暮煙地に生じて、その影だに見えなくなつた。君は、山中に在つて、古しへ孫登の樣な人に從つて、嘯を學び、その聲は、鸞鳳の音の如く、響は、いつまでも殘つて居るし、たまたま、世間に出て來て、留題の詩を書かれても、決して姓名を寫さず、その高懷、まことに佩服すべきである。君の近くなる西磵には、世すて人の張羽が住んで居るが、今度、還つて遇はれたならば、年ごろ、易を註して居たが、今、幾卦を終つたか、予に代つて尋ねて見て吳れろ。

丫髻峰

（一）雙縮雲鬟作（二）髻髽。　雙んで雲鬟を縮ねて、髻髽と作す、
（三）小姑當日嫁誰家。　小姑、當日、誰が家にか嫁す。
雲滋細草頭梳髮。　雲は細草を滋して、頭、髮を梳り、
風動奇芳鬢插花。　風は奇芳を動かして、鬢、花を插む。
（四）鸞鏡夜憑松挂月。　鸞鏡は、夜、松の月を挂くるに憑り、
（五）鳳釵春待竹生芽。　鳳釵は、春、竹の芽を生ずるを待つ。
行人莫起（六）陽臺念。　行人起す莫れ陽臺の念、
（七）雲雨無情路更賒。　雲雨無情、路、更に賒かなり。

【字解】【一】雙縮　ならんで束ね上げる。【二】髻髽　まげ。【三】小姑　山名、前に卷六、送賓鏇史の詩中にも見えたが「彭澤の小姑山は、大江の中流に在り、四面斗絶、惟だ南岸登るべし」とあり、歸田錄に「小孤山、世、孤を轉じて姑となす、江側に一石磯あり、これを彭浪磯といひ、遂に轉じて彭郎と爲る、云ふ、彭郎は小姑の壻なり」とある。【四】鸞鏡　裏に鸞鳳を鑄出したる銅鏡。【五】鳳釵　飾りとして鳳凰を付けた金釵。【六】陽臺　楚の襄王が逢つた巫山の神女が朝爲行雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下といひしに本づく。【七】雲雨　上に見ゆ。

【題義】江寧府志に「丫髻山は、溧陽縣北に在つて、兩峰、髻の如し」とあり、又句容志には蛤幘山に作つてある。

【詩意】雲の如き髮を竝び縮ねて、雙髻として居るが、小姑に比すべき此山は、當日、誰の處に嫁して行くのか。雲が細草を潤せば、丸で頭上の毛を梳つた樣であるし、風が奇芳を動かせば、さながら鬢に花を插んだ如くである。鸞鏡は、如何するかといへば、夜な夜な、松に月の挂れるを以て之に代用すべく、鳳釵は有るかといへば、春、竹に芽を生ずるを待つて、これに充當することが出來る。行

人は、この山を望むとも、陽臺の念を起さぬが善いので、雲雨ともに無情なるが上に、路、更に遙にして、到底、その處に往つて神女に逢ふことは出來ない。

【餘論】篇中、雲の字の三出は、餘りひどい。

石牛

(一)一拳怪石老山巓。
頭角(二)崢嶸幾百年。
毛長紫苔春夜雨。
身藏青草夕陽天。
中宵望月何(三)曾喘。
盡日看雲自在眠。
惱殺牧童呼不起。
數聲長笛思悠然。

石牛

一拳の怪石、山巓に老ゆ、
頭角崢嶸、幾百年。
毛は紫苔を長ず、春夜の雨、
身は青草に藏る、夕陽の天。
中宵月を望むも、何ぞ曾て喘がむ、
盡日、雲を看て、自在に眠る。
牧童を惱殺して、呼べども起たず、
數聲の長笛、思悠然。

【字解】【一】一拳　拳の如き形せる。【二】崢嶸　高く尖れる貌。【三】何曾喘　喘はあへぐ、世説に「滿奮、體羸にして風を畏る、晉武の座に在るや、北窓に琉璃屏を作し、實は密にして疎なるに似たり、奮、難色あり、帝、これを笑ふ。奮曰く、臣、猶ほ呉牛の月を見て喘ぐが如し」とあつて、注に「今の水牛は、唯だ江淮の間に產するのみ、故に呉牛と云ふ。南方、暑多く、しかも、この牛、熱を畏れ、月を見て、これ日と疑ふ、喘ぐ所以なり」とある。

【題義】姑蘇志に「長洲縣丸都通國橋西の石牛菴、菴前に石牛あるに因る。相傳ふ、唐時の物、故に名づく」とあつて、この詩は、卽ち其石牛を詠じたのである。

【詩意】拳の形せる怪石は、山巓に在つて老いむとし、頭角は、崢嶸として尖り、すでに幾百年を經過したか。春夜の雨に濡れて、紫苔が伸びると、さながら、毛の如く、夕日の頃は、身を青草の中に藏して居る。夜中に月を見ても、本當の牛ではないから、決して、喘ぐことなく、終日、雲を看て、隨意に眠つて居るだけである。いくら呼ばはつても起き上らぬので、はては、牧童を惱殺せしめ、長笛數聲、吹きすさび、思悠然として、やがて立ち去るであらう。

飲陳山人園次能翁韻

陳山人の園に飲み、能翁の韻に次す

桃花梨花已(一)狼藉。
(二)躑躅花開如火炎。
時過(三)上巳和而暢。
人比(四)杜陵清且廉。
園中雨流水繞砌。

桃花梨花、すでに狼藉、
躑躅、花開いて火炎の如し。
時は上巳を過ぎて、和にして暢、
人は杜陵に比して、淸且つ廉。
園中、雨流れて、水、砌を繞り、

【字解】【一】狼藉　地に散り布いた貌。【二】躑躅　つつじ、前に卷二、竹枝歌、其四の詩中に見ゆ。【三】上巳　三月三日、前に上巳有懷の詩中に見ゆ。【四】杜陵　杜甫を云ふ、長安の近郊杜陵に住居せしが故に云ふ、その詩に、杜陵野客人

更嘆とある。【五】謬語　間違った言葉、出たら目。

林下鳥鳴風滿簾。　林下、鳥鳴いて、風、簾に滿つ。
把酒亦知君意好。　酒を把つて、亦た知る君が意好きを、
醉多謬(五)語莫相嫌。　醉うて、謬語多きも、相嫌ふ莫れ。

【題義】 陳山人、能翁、ともに如何なる人か分からぬ。この詩は、陳山人の庭園に於て會飲し、仍つて、能翁の詩韻に次したのである。

【詩意】 桃の花、梨の花、ともに地に散り布きて、花片狼藉、ひとり、つつじの花のみが咲き出でて、焔の如く、眞ッ赤である。時は、三月三日、上巳の節を過ぎたれども、暄和にして、氣分はのびやかであるし、主人は、杜甫に比して、一しほ淸廉である。園中、雨後の水流れて階を繞り、林下鳥が啼いて、薰風が簾に滿ちて居る。酒を把つて、君の好意を知つたので、醉うて、謬語多くとも、どうか赦して貰ひたい。

【餘論】 この詩は、一種の拗體であつて、第一・第二・第五の數句は、丸で平仄を打壞して居る。結末は、陶淵明の君須恕醉人と略ぼ同義である。

寄題内弟周思敬野人居

内弟周思敬の野人居に寄題す

野人(一)何處是幽棲、　野人、何の處か是れ幽棲、
聞在天(二)隨舊宅西。　聞く天隨舊宅の西に在りと。
半屋圖書春落蠹(三)、　半屋の圖書、春、蠹を落し、
一村花柳晝鳴雞。　一村の花柳、晝、雞を鳴かしむ。
分(四)泉自給烹茶水、　泉を分つて、自ら給す茶を烹るの水、
待雨惟耕種(五)藥畦。　雨を待つて、惟だ耕す藥を種うるの畦。
日暮扁舟欲相訪、　日暮、扁舟、相訪はむと欲す、
恐驚鷗鳥過前溪。　恐らくは鷗鳥を驚かして、前溪を過ぎむ。

【字解】【一】野人何處　起句は何處是野人幽棲といふに同じく、即ち野人居は何處といふ義。【二】天隨舊宅　天隨は陸龜蒙の別號、即ち陸氏舊宅の西といふ義。陸龜蒙の事は、前に卷十三、臨頓里題下の原注に「城東に在り、舊と吳中の勝地たり、陸魯望の居るところなり」とある。【三】落蠹　紙魚を拂ひ落す。【四】分泉　泉を分つて引いて來る。【五】種藥畦　藥圃・藥園に同じ、姚合の詩に傍階是藥畦とある。

【題義】 内弟は妻の弟、青邱の妻の同胞の事に就いては、前に卷六、與内兄周思齊・思義同過僧浩西齋夜酌の題下に姑蘇志を引いて詳說して置いた。この詩は、即ち野人居と號する思齊の幽棲に寄題したのである。

【詩意】 君の謂はゆる野人居は、何處に在るかといへば、陸龜蒙の舊宅、即ち臨頓里の西に在るとの話。半屋の圖書は、春に當つて、紙魚を拂ひ落し、一村の花柳は、眞晝に、雞が鳴いて居る。遠くよ

り泉を引いて、茶を烹るの水となし、雨後ただ藥圃を耕すのが仕事である。日暮に、扁舟に乘つて、尋ねやうと思つたが、心のどけき鷗を驚かして、前溪を過ぎしめむことを恐れて、一寸さし控へた。

謁伍相祠

伍相祠に謁す

地老天荒伯業空。　地老い、天荒れて、伯業空し、

（一）

曾於青史見遺功。　かつて、青史に於て遺功を見る。

（二）

鞭屍楚墓生前孝。　屍を楚墓に鞭つ、生前の孝、

（三）

抉目吳門死後忠。　目を吳門に抉る、死後の忠。

（四）

魂壓怒濤翻白浪。　魂は怒濤を壓して、白浪を翻し、

（五）

劍埋寃血起腥風。　劍は寃血に埋つて、腥風を起す。

（六）

我來無限傷心事。　われ來つて、無限傷心の事、

盡在越山煙雨中。　盡く越山煙雨の中に在り。

【字解】【一】伯業　覇業に同じ。【二】曾於青史　劉長卿の詩に功名滿青史、祠廟惟蒼苔とあり、溫庭筠の詩に曾於青史見遺文とある。【三】鞭屍楚墓　史記伍子胥傳に「吳兵、郢に入るに及び、子胥、昭王を求むれども、すでに得ず、乃ち楚の平王の墓を掘つて、その尸を出し、これを鞭つこと三百」とある。【四】抉目吳門　國語に「伍員、將に死せむとす、曰く而、わが目を東門に縣け、以て越の入り、吳國の亡ぶるを見むと、遂に自殺す」とあり、說苑に「孔子曰く、子、諫者を以て、必ず聽くと爲すか。伍子胥、何すれぞ目を吳の東門に抉る」とある。【五】魂壓怒濤　吳越春秋に「子胥死す、吳王、これを江中に投ず、因つて、流に隨つて波を揚げ、潮に依つて來往し、蕩激、岸を崩す」とあり、孫蕡の詩に江落伍胥潮とある。【六】劍埋寃血　劍は即ち屬鏤、吳越春秋に「吳王、子胥の怨恨を聞くや、乃ち人をして屬鏤の劍を賜はしむ」とある。

【題義】伍相、名は員、字は子胥、吳の相たりしが故に、伍相といつたのである。この祠は、前に卷二、弔伍子胥祠の原注に「子胥の廟は、盤門の内に在り」と記してあつたと同じであらう。從つて、この詩は、弔伍子胥祠と併せ見るべきものである。

【詩意】地老い、天荒れ、早くも千載を經たれば、吳國の霸業、すでに空しく、かつて、青史に於て遺功を見ただけである。伍子胥が楚の平王の墓を發いて、その屍を鞭ちしは、生前の孝と爲すべく、目を吳の東門に懸けよといつたのは、死後の忠と稱すべきものである。子胥は、屍を江中に棄てられしに因り、その魂は、怒濤を壓して白浪を翻し、屬鏤の劍は、寃血の中に埋れて、腥風を起すといふ有樣で、その死は、慘澹の極である。ここに、その祠廟を弔へば、傷心の事は、越山の煙雨に閉ぢこめられて、限りなきを覺ゆるばかりである。

弔七姬冢

七姬の冢を弔ふ

（一）

疊玉連珠棄草根。　疊玉連珠、草根に棄つ、

【字解】【一】疊玉連珠　七姬を

仙游應逐墜樓魂。　仙游、應に逐ふべし墜樓の魂。

孤墳掩夜香初冷。　孤墳、夜を掩うて、香、初めて冷かに、

幾帳留春被尚溫。　幾帳、春を留めて、被、尚ほ溫かなり。

佳麗總傷身薄命。　佳麗、すべて傷む身の薄命、

艱危未負主多恩。　艱危、未だ負かず主の恩多きに。

爭妍無復呈歌舞。　妍を爭うて、復た歌舞を呈するなし、

寂寂蒼苔鎖院門。　寂寂蒼苔、院門を鎖す。

云ふ。【三】墜樓魂　石崇の妾綠珠が金谷園中の高樓より身を地に投じて、先づ死せしことを云ふ。

【題義】姑蘇志に「七姫の墓は、郡治の東北隅、潘氏の後園に在り。張羽、權厝志を作る。七姫は皆良家の子、浙江行省左丞滎陽の潘公に事へて、皆側室たり。性皆柔慧、姿容皆端麗、修潔、女紅を善くし、衣繡を剪製するに、手を經れば皆精巧絶倫、その主及び夫人に事ふるに、皆能く禮を以てし、その羣居する、和して序あり、皆、怙寵忮美の行を爲さず。公、閭閻間の婦女、能く節槩を以て自立するものを聞く毎に、歸つて必ず爲に其事を語る。皆應へて曰く、彼、亦た人爲のみ、と。公笑つて曰く、若、果して能くするかと。外難興り、敵城下に抵るに及び、公、日に戰に臨む、一旦、歸つて七姫を召し、謂つて曰く、われ國の重寄を受く、義として家を顧みず、もし宿せざるあらば、若等を誡めて、當に自ら引決すべし、人に恥かしめらるること毋れ、と。一姫、跪いて前んで曰く、主君、妾を遇する厚し、妾、終に二心なし、請ふ、君の時に及び、死して以て報い、君をして疑はしむること毋からむ、と。遂に趨つて室に入り、その帨を以て、自經して戸に死す。六人の者、亦た皆相繼いで經死す。公、これを聞いて曰く、何ぞ、若遽に死するや、と。實に至正丁未七月五日なり。世難を以て葬る克はず、乃ち其屍を斂して之を焚き、復た其遺骸を以て、後圃に瘞め、合して一冢となす。公、還つて其封を啓き、且つ泣いて曰く、これ若の安んずるところに非ざるなり、と。行營高敞の地にして遷す。時に、日薄きの故を以て、未だ志を爲すに暇あらず、月を踰ゆるに及びて、はじめて、その事を狀し、羽に屬して、將に石に勒し、追うて冢側に瘞めむとす。かつて、古しへの史氏載するところを觀るに、貞妃烈婦、能く節義を識り、死生を決して、顧みざるもの、恆に世を曠うして一見す。今、乃ち一家に于て、一日にして七人を得たり、吁、奇ならざらむや。乃ち其姓氏を石に列して、これに系くるに銘を以てす。程氏、蜀郡の人、年三十、女一人生奴を生む。翟氏、廣陵の人、年二十三。徐氏、黄岡の人、年二十、女一人不惜を生む。羅氏、濮州の人、年二十三。卞氏、海陵の人、年、羅氏と同じ。彭氏、卞氏と同郡、その年、徐氏と同じ。段氏、大寧の人、年十八。その先つて死するものなり。公、名は元紹、字は仲紹、實に宋の魏王廷美の裔、その先、禍を避くるを以て、今の姓に易へて、未だ復せずと云ふ。銘に曰く、生也同其天、死也同其時、而瘞又同其封、壤

樹蕭條、匪二子之宮一、尚卜二高原一、以永二無窮一」と。これで七姫の顛末は、すつかり分かるので、この詩は、卽ち其墓を弔うて作つたのである。

【詩意】七姫の同時に死んだのは、たとへば、珠玉を連ねて草根に棄てたと同じく、その魂は、仙游して、むかし、樓上から身を投じて死んだ彼の綠珠の後を追つたことであらう。孤墳、夜を掩うて、脂粉の香、初めて冷かに、幾處の綺帳は、春の名殘を留めて、夜具は猶は溫かい。佳麗の身を以て、薄命なりしは、すべて傷むべく、艱危に際して、主家の厚恩に負かなかつたのは、まことに偉い。七人、姸を爭へども、最早、歌舞を呈することなく、蒼苔寂寂として、舊院の門を鎖ち、凄涼滿目、まことに銷魂の思に堪へぬ。

郡治上梁

(一)郡治新還(二)舊觀雄。郡治、新に還る舊觀の雄、
(三)文梁高擧跨二晴空一。文梁、高く擧がつて晴空に跨る。
南山久養(四)干レ雲器。南山、久しく養ふ雲を干すの器、
東海初生(五)貫レ日虹。東海、初めて生ず日を貫くの虹。
欲レ與二(六)龍庭一宣二化遠一。龍庭と化を宣べて遠からむを欲す、
還開二(七)燕寢一賦二詩工一。還た燕寢を開いて、詩を賦する工なり。
大材今作二(八)黄堂用一。大材、今、黄堂の用を作す、
民庶多歸(九)廣庇中。民庶多く歸す廣庇の中。

【字解】【一】郡治　呉郡の官府、卽ち督府。【二】舊觀　觀は樓觀の義。【三】文梁　綺麗に彩りたる梁木。【四】干雲器　景福殿賦に飛閣干レ雲、浮楹乘レ虛とあつて、その用材を云ふ。【五】貫日虹　鄱陽の獄中上二梁王一書に「荊軻、燕丹の義を慕ひ、白虹、日を貫き、太子、これを畏る」とあり、班固の西都賦に抗二應龍之虹梁一とある。【六】龍庭　龍は白龍堆、塞外の胡國、司馬光の詩に朱節耀二龍庭一とある。【七】燕寢　正寢、客座敷、韋應物の郡齋燕集詩に燕寢凝二清香一とある。【八】黄堂　姑蘇志に「蘇州府治、春申君の子の建つるところ、數ば火を失ふに因つて、塗るに雄黄を以てす、故に名づく」とある。【九】廣庇　廣く庇護する。

【題義】郡治は郡の役所。上梁は棟上式。その式の時には、上梁文を讀み上げ、その中には、抛二梁東一より始めて梁北・梁上・梁下とあつて、各〻短い詩がある。この詩は、上梁文中の詩ではなく、上梁を賀して別に作つたのである。

【詩意】蘇州の郡治は、元末に、一たび他に移つたが、今回、舊觀の在るところに復することに成つて、新築工事を始め、彩りたる梁木は、高く擧がつて晴空に跨り、今日は、愈〻棟上の式を行ふといふ段取に成つて來た。南山に於ては、雲を侵す樣な用材を養ふこと、すでに久しく、今專ら其材を使用し、その虹梁の上つた樣は、東海に於て、日を貫く虹が初めて出た樣である。郡治一たび成つて、治績愈〻揚がり、やがて、塞外の胡國にまで遠く其化を宣ぶることと成らう。そこで、客座敷を開い

て、宴を設け、詩を賦すと、いづれも工妙である。折角の大材も、今や府治建築の役に立てば、まことに本望の至なるべく、一般民庶は、多く、その廣き庇護の中に來集することであらう。

【餘論】青邱が罪を得て刑死したのは、郡治上梁文の爲めであるといふことで、その上梁は、洪武六年の末、青邱の死は、翌七年の九月である。これに就いては、門人呂勉の撰せる槎軒集の本傳に「歳壬子、國子祭酒江夏の魏觀、來つて府事に知たり。先生、かつて京に會し、舊好に敦く、爲に居を城中の夏侯橋に徙し、以て朝夕の親與に便す。蓋し、觀は勝國の遺才たり、頗る自ら矜詡し、矧んや、青烏の經術を解し、任に到り、第だ更張を欲す。吳城に蛇門なきを以て、東南水陸より來るの生氣間沮す、故に百年の富、極品の貴、甚だ妨ぐるところありと、圖つて之を闢かむと欲す。これより先、在城の諸委港、久しく淤し、舟艇往來、便ならず、民を役して挑濬甚だ急、すでに久しく、怨を斂む。又府治は、乃ち前元の都水屯田司、西に偏し、すなはち武衞の下に出づるを以て城の中央の舊治に卽いて之を新にす。吳帥、その左に居るを慮り、且つ觀内より出で、諸帥俯して見るも、禮を爲さす、銜んで密に之を疏す。尋いで、張度御史あり、來つて微行して、その跡を廉し、先生、嘗て爲に上梁文を撰し、王彝、河を浚うて佳硯を獲るに因つて、爲に頌を作るを以て、併せて、目して黨となし、倶に攣して京に赴く」とあり、重きを浚河に置いて居るが、楊循吉の吳中故語には「蘇州郡治は、本と城の中央に在り、僭周、國を稱し、遂に以て宮となす。元、都水行司あり、胥門内に在り、乃ち遷つて治す。士誠の俘にせらるるに及び、悉く煨燼を縱つて、荒墟となる。知府魏觀、道を學んで人を愛し、治に臨みて大に民和を得たり、署の隘きに因つて、舊地を按じて之に徙る。正に僞宮の廢址に當る。初め、城中に港あり、錦帆涇といふ。久しうして、すでに湮塞す、亦た之を通す、時に右列方に張る、乃ち飛言を爲し、上聞して云ふ、觀、宮を復し、涇を開くは、心に異圖あるなりと。上、御史張度をして覘はしむ。度は一狡獪の人、郡に至れば、僞つて役人となり、搬運の勞を執り、その中に雜事す。斧斤工畢るや、吉を擇びて構架す、觀、親を以て、その下人を勞して一杯を與ふ。御史、ひとり謝して飮まず。この日、高啓、上梁文を爲る。はじめ、啓、侍郎を以て引いて歸り、夜、龍灣に宿す。夢に、父、その掌に書して一の魏の字を作つて云ふ、與に相見るを愼めと。啓、これに由つて、避けて甫里に匿れ、絶えて城に入らず。然れども、觀は賢守、愛被殷勤、啓、遂に夢の告を忽にす、ここに至りて、觀、啓と竝に罪を得、前工、盡く輟め、郡治、猶ほ都水司の舊に仍る」とあつて、郡治改築の方を主とし、陸釴の病逸漫記、及び蘇州府志も、皆之に同じである。何は兎もあれ、高啓が上梁文が、その罪を得る一因となつたことは確實で、この七律は、上梁の賀詩であるから、もとより關係あるものと見ねばならぬ。

萬木堂爲毘陵卞公禮賦

萬木堂、毘陵卞公禮の爲に賦す

林隱高堂萬木青。　林は高堂を隱して萬木青く、
森然(一)玉立勢亭亭。　森然玉立、勢亭亭。
春風送暖花連砌。　春風、暖を送つて、花、砌に連り、
秋雨生涼葉滿庭。　秋雨、涼を生じて、葉、庭に滿つ。
坐愛(二)繁陰簾半捲。　坐しては繁陰を愛して、簾、半ば捲き、
臥聽(三)靈籟戶深扃。　臥しては靈籟を聽いて、戶、深く扃づ。
斧斤未許來(四)樵採。　斧斤、未だ許さず、來つて樵採するを、
要養長材獻(五)大廷。　長材を養うて、大廷に獻ずるを要す。

【字解】【一】玉立　見事に立つ。【二】繁陰　こんもりせる木かげ。【三】靈籟　籟は元と風の吹き入る孔穴であるが、後には、風聲の義に用ふ。【四】樵採　薪を採る。【五】大廷　朝廷。

【題義】一統志に「常州府、晉には毘陵といふ」とある。この詩は、常州の卞禮の萬木堂に寄題したのである。卞禮は、如何なる人か分からぬが、公といつて尊稱した處を見ると、或は其地の知府かも知れぬ。

【詩意】萬木の名にしおふ林は、高堂を隱して靑く、木木は森然として見事に竝び立つて、その勢は、亭亭として居る。春風、暖を送るとき、花は階下に連り、秋雨、涼を生ずる處、落葉は庭に一ぱいである。坐しては、木かげの繁きを愛して、簾を半ば捲き上げ、臥しては、靈籟を聞いて、戶を深く閉ぢてある。この林には、斧斤を攜へて、入つて薪を伐ることを許さず、丈の長い用材を仕立て上げて、朝廷に獻ずることが必要である。

【餘論】長材を養ふは、卽ち人材を養成することに比したので、通篇、比の體とも見るべく、又、結末一步を拓開したものと見ても善い。

鶴瓢二首

鶴瓢　二首

產自(一)靈苗勝(二)羽胎。　靈苗より產して、羽胎に勝れり、
何須去作(三)鳳匏來。　何ぞ須ひむ、去つて鳳匏となつて來るを。
(四)壺公本解飛騰術。　壺公、本と解す飛騰の術、
(五)丁令寧爲(六)濩落材。　丁令、寧ろ濩落の材たらむや。
直上靑天身恐繫。　直に靑天に上つて、身、繫がるるを恐れ、
(七)倒傾碧海腹初開。　倒に碧海を傾けて、腹、初めて開く。

【字解】【一】產自靈苗　文同の謝寄藥方の詩に我聞神仙草藥不凡土生是中當有靈苗異卉之根莖とある。【二】羽胎　胎生の鳥類、かつて冷齋夜話に「彭淵材、性迂濶、かつて兩鶴を畜ふ。客至る、誇つて曰く、これ仙禽なり、凡禽は卵生、これは胎生、と。語未だ畢らず、園丁報じて曰く、鶴、夜、一卵を產すと。淵

生成自是神仙器。　生成、自ら是れ神仙の器、
肯逐纍纍（八）向草萊。　肯て纍纍を逐うて草萊に向はむや。

材阿して曰く、敢て鶴を誘るか、と。未だ幾ならず、鶴、翮を展べて地に伏し、復た一卵を誕す、濕材歎じて曰く、鶴、亦た道を敗る。晉乃ち禹錫の嘉語に誤らる」とあり、劉賓客嘉話錄に「人言ふ、鶴は胎生と。賦に胎化仙禽と云ふ所以なり」とある。【三】鳳匏　鳳笙をいふ。潘岳の笙賦に有曲沃之懸匏焉とあつて、その注に「笙を匏中に列し、簧を管端に施し、これを名づけて笙といふ」とあり、廣集の詩に長吟吹鳳匏とある。【四】壺公　神仙傳に「汝南に費長房あり、市掾たり、公が市に入つて藥を賣るを見る、常に一空壺を懸け、日入るの後、公跳つて壺中に入る、人能く見るなし。惟だ、長房、樓上に於て之を見、常人に非ざるを知り、乃ち日日自ら公が座前の地を掃ひ、及び餌物を供す。公、その篤信を知り、ともに壺中に入り、符一卷を封じ、これを付して曰く、これ鬼神を主り、能く地脈を縮むべし」とある。【五】丁令　即ち丁令威、前に數ば見ゆ。洞仙傳に「丁令威は、遼東の人、少にして師に隨つて學び、仙道を得、分身して意の欲するところに任かす。かつて、暫く歸り、化して白鶴となり、郡城門の華表柱頭に集まる」とある。【六】濩落　莊子に「惠子、莊子に謂つて曰く、魏王、われに大瓠の種を貽る、われ之を樹ゑて成り、五石を實たし、以て水漿を盛る、その堅きこと、自ら擧ぐる能はざるなり、これを剖いて、以て瓢と爲さば、濩落容るるところなし。呺然として大ならざるに非ざるなり、われ、その無用の爲にして之を掊く」とあつて、その注に「濩落は、猶ほ廓落のごときなり」とある。【七】倒傾碧海　吳質の答東阿王書に「海を傾けて酒と爲し、山を幷せて肴と爲す」とある。【八】纍纍　匏の多く蔓に生つて居る貌。

【題義】鶴瓢は、前に卷四、約幼文同宿鶴瓢山房の題下に詳述して置いたが、王行の鶴瓢山房記に「黃老師といふものあり、蜀の青城山より來り、道氣崐峭、一堂盡く傾く、君（李睿）これを遇すること、殊に謹む。居ること數月、去るを告げ、一瓢を出して曰く、これ我に從ふ幾百年、地を行くこと萬里に餘る、今、以て汝に遺る、これを見る、我を見るが如くせよ、これを勉めよ、と。瓢の形、鶴に類す、遂に鶴を以て之に名づく、幷せて、その室に題して鶴瓢山房といひ、仍つて、以て自ら號とす、黃師を尊信するの意なり」とある。この詩は、寧眞道館の主人李睿の珍藏せる鶴の形せる瓢を詠じたのである。

【詩意】この瓢は、元と靈苗より產して、胎生と稱する靈禽に勝つて居るので、今さら、鳳笙に作る必要もない。瓢の中に住んで居た壺公は、もとより、飛騰の術を心得て居た仙人であるし、丁令威は、鶴に化したが、決して、廓落たる無用の材ではない。この瓢は、鶴の形をして居るから、直に青天に上り、その身の繫がれむことを恐れ、又倒に碧海を傾け、その水を飲み盡して、腹が初めて開いた。その瓢たるや、生成して神仙の用具となつたので、どうして、纍纍たる他の瓢實とともに、草萊の中に留まつて居やうか。要するに、この瓢は、鶴の形をして居るだけに、極めて靈異なものであるから、決して、粗末に取り扱つてはならぬ。

遠隨仙客（一）下青城（二）。　遠く仙客に隨つて青城を下る、
瘦骨肥來見盡驚。　瘦骨肥え來り、見て盡く驚く。

【字解】【一】仙客　黃道士、前首の題義を見よ。【二】青城　山名、地理通釋に「山は、永康郡青城縣北

藜杖夜懸(三)翻レ露影。　藜杖、夜は懸く露に翻るの影、
(四)竹樽春瀉飮レ泉聲。　竹樽、春は瀉ぐ泉を飮むの聲。
園中幾歲形容變。　園中、幾歲か形容變じ、
海上何時羽翼成。　海上、何の時か羽翼成る。
醉聽(五)樹頭風歷歷。　醉うて聽く、樹頭風歷歷、
還疑秋傍二(六)九皐一鳴。　還た疑ふ、秋、九皐に傍うて鳴くを。

に在り、岷山の第一峰なり、仙經に曰く、此は是れ第五洞天」とある。【三】翻露影　前に卷十三、詠レ夢の詩中にも引いたが、風土記に「白露暫く警む、八月白露降り、草葉に流れ、滴滴聲あれば、卽ち鳴く」とある。【四】竹樽春瀉　顧瑛の詩に、「剉瓔縣匏竹裏尊」とある。【五】樹頭風歷歷　前に卷三、鶴瓢山房の詩中に引いたが、逸士傳に「許由、手に水を捧げて飮む、人、一瓢を遺る、飮み訖つて、木上に挂くれば、風吹いて聲あり、由、以て煩はしと爲して之を去る」とある。【六】九皐　ひろい澤地。

【詩意】鶴瓢は、黃道士に隨つて遠く青城山より下つて來たが、これまで、瘦せて居た骨も肥えて、見るもの、盡く驚くばかり。その瓢を、藜の杖の先に挂けると、夜、露の流るる處に影を映し、鶴は、白露の節に鳴くといふのも詐ならず、そして、春に當つて、竹樽から酒を注ぐと、泉を飮む樣な聲がする。園中に在ること、すでに幾載、形容、いつしか變じ、海上に持つて行くと、何時、羽翼が出來て飛び去るか、この瓢を木の上に懸け、風に吹かれて、歷歷と鳴るのを醉中に聽いて居ると、秋、九皐に傍うて、鶴が鳴くかと疑ふばかりである。

次二楊禮曹雨中養一レ痾　　楊禮曹の雨中痾を養ふに次す

(一)午晴(二)書閣暫令レ開。　午晴、書閣、暫く開かしむ、
又聽(三)鳴鳩竹外催。　又聽く、鳴鳩の竹外に催すを。
身到二遠山一(四)屛乍展。　身は遠山に到つて、屛、乍ち展び、
手持二明月一(五)扇初裁。　手に明月を持して、扇、初めて裁す。
(六)綠芳消レ砌(七)風前蕙。　綠芳、砌に消ゆ風前の蕙、
(八)朱果封レ泥雨後梅。　朱果、泥に封す雨後の梅。
曲巷(九)掩レ關人寂寂。　曲巷、關を掩うて人寂寂、
今朝問レ疾有レ誰來。　今朝、疾を問ふ、誰かあつて來る。

【字解】【一】午晴　眞晝頃の快晴。【二】書閣　書齋に同じ。【三】鳴鳩　陸游の詩に鳴鳩又喚二雨絲一來とある。【四】屛乍展　李白の詩に疑似三天邊十二峰、飛入二君家彩屛裏一とある。【五】扇初裁　李商隱の詩に書屛不レ取レ暖、月扇未レ遮レ暑とある。【六】綠芳　綠色の花。【七】風前蕙　蕙は蘭の類、一莖一花なるもの、俗に山蘭といふ。【八】朱果　梅の實のよく熟したるを云ふ。【九】掩關　門を鎖す。

【題義】この題は、前にも二首あつて、多分、その前後の作だらうと思はれる。

【詩意】眞晝の快晴に乘じ、しばらく、書齋を明け放しにして、竹外に於て鳩の鳴くのを聞いた。屛風が乍ち展くと、畫中の山は極めて近く、丁度、この身、遠山に至りし想を爲し、團扇が初めて出來たから、これを持つと、手に明月を弄する樣な氣がする。風前の蕙は、階下に消えて、綠芳、すでに

香なく、雨後の梅の實は、泥の中に落ちて、赤くうんで居る。曲れる裏小路なる門を閉づれば、寂寂として極めて靜に、今日、病氣見舞の爲に誰か來たか、さういふ人は無いらしい。

詠梅次衍師韻五首　梅を詠す、衍師の韻に次す　五首

水郭山村路(一)半交。　水郭山村、路、半ば交る、
春晴依約(二)見芳苞(三)。　春晴、依約として芳苞を見る。
(四)呉姫舞竟珠鈿(五)委。　呉姫、舞、竟つて珠鈿委し、
(六)漢女游歸玉珮抛。　漢女、游、歸つて玉珮抛つ。
愁亂雪來朝片片。　亂雪の來るを愁へて朝に片片、
夢驚風過夜梢梢。　驚風の過ぐるを夢みて夜梢梢。
人間何處無開落(七)。　人間、何の處か、開落なからむ、
吹笛何須怨老蛟(八)。　笛を吹いて何ぞ老蛟を怨むるを須ひむ。

【字解】【一】路半交　路が交叉して居る。【二】依約　ほのかなる貌。【三】芳苞　梅の蕾。【四】呉姫　西施を云ふ、王維の詩に、朝仍越谿女、暮作呉宮妃」とある。【五】珠鈿委　珠の釵が地に落ちる。【六】漢女　列仙傳に「鄭交甫、江漢の湄に於て二女に逢ふ、皆麗服華妝、兩明珠を佩び、大さ雞卵の如し、解いて交甫に贈る」とある。【七】開落　樂錄に「漢の橫吹曲、梅花落、本と笛中の曲なり」とあり、于武陵の詩に朱欄滿明月、美人歌落梅」とある。【八】老蛟　前に卷五、松江亭、及び卷十一、青邱子歌の詩中に引いたが、博異志に君山の老父が笛を吹くことが記して「言畢り、笛を抽いて吹くこと三聲、湖上風動き、波濤沆瀁、魚鼈跳噴、五聲六聲、君山の上、鳥獸叫噪、月色昏暗、舟人大に恐る」とある。

【題義】説明に及ばぬ。衍師は、卽ち道衍、前に卷三、春日懷十友を始めとして、處處に散見して居る。

【詩意】水郭山村、野徑の交叉する邊に、梅の木があつて、新晴の春、ほのかなる頃、ふくらんだ蕾がはツきりと見える。その梅花の滿開は、西施が舞終りしとき、珠鈿地に委するが如く、漢女游び歸り、玉珮を抛つて人に贈るが如くである。朝、花びらが一つ一つ飄る時は、亂雪の來るかと疑はれて、愁に堪へず、夜、梢梢に聲ある折は、夢も驚風の過ぐるに因つて醒める。折角の此花も、御多分に漏れず、開けば、やがて散るので、必ずしも笛を弄し、老蛟をして怨ましめるばかりの聲を爲して、吹き立てずとも善い。

(一)壓枝何處斷人腸。　枝を壓して、何の處にか人腸を斷つ、
欲問黃家第四娘(二)。　問はむと欲す、黃家の第四娘。
雞早每驚煙際色。　雞は早く、每に驚く煙際の色、
蝶遲那識雪中香。　蝶は遲く、那ぞ識らむ雪中の香。

【字解】【一】壓枝　梅花の繁開するを云ふ。【二】黃家第四娘　杜甫の詩に黃四娘家花滿蹊、千朶萬朶壓枝低とある。【三】綃帳　薄絹の戸ばり。【四】素裳　白衣に同じ。【五】揚州回首　前に數〻見ゆ。何

遐の故事。

林昏有霧籠綃帳。　林昏くして霧あり、綃帳を籠め、
江淨無塵染素裳。　江淨くして、塵の素裳を染むるなし。
此日一尊聊自慰。　この日一尊、聊か自ら慰む、
揚州回首月荒涼。　揚州、首を回らせば、月荒涼。

【詩意】梅花は、人の心腸を斷つばかりに、何處で十二分に咲き滿ちて居るか、兎も角も、花を種うるに因つて名を知られたる彼の黃四娘の家を尋ねて見やう。雞聲、なほ早き曉の頃、煙際の色、殊の外白きに驚かされ、蝶は、春の半ば過ぎでなければ、出て來ぬから、折角ながら、雪中の香を識別しない。林昏くして、霧ある時は、薄ぎぬの戶ばりを垂れたかと疑はれ、江天淨くして、素衣に塵は少しもかかつて居らぬ。この日、一樽を傾け、ひとりで聊か慰めて居るが、かの揚州東閣の梅花は如何なつたか、首を回らせば、月色荒涼として、まことに傷心の至である。

海天寒徹玉人衣。　海天寒は徹す玉人の衣、
密雨疏煙晚漸披。　密雨疏煙、晚、漸く披く。
春後春前曾獨看。　春後春前、かつて獨り看る、
江南江北每相思。　江南江北、每に相思ふ。
猿啼古驛征帆宿。　猿は古驛に啼いて征帆宿し、
馬立荒郊酒旆垂。　馬は荒郊に立つて酒旆垂る。
擬折一枝供寂寞。　一枝を折つて寂寞に供せむと擬す、
東風無那欲殘時。　東風、那かんともするなし殘せむと欲するの時。

【字解】【一】玉人　拾遺記に「蜀の先主の甘后、玉質柔肌、態媚にして容冶、河南、玉人を獻ず、高さ三尺、乃ち玉人を取つて后の側に置く。后、玉人と潔白齊潤、嬖寵の者、惟だ后を嫉むのみならず、亦た玉人を妬む」とある。【二】晚漸披　披は解散。【三】酒旆　酒旗に同じ。【四】供寂寞　寂寞に苦む人に贈る。【五】欲殘　散りかかる。

【詩意】梅花の淸冷を極めたるは、たとへば、海天の極寒が玉人の衣に徹したるが如く、密雨疏煙が日暮に成つて漸く解散すると、はじめて蘇生した樣に氣を增して來る。春の前後、かつて、獨り此花だけは見逃さじとし、江の南北、如何なる處に於ても、この花を思はぬことはない。猿が古驛に啼いて、征帆、はじめて宿せし處、馬を荒郊に立てて、遙に酒旗の垂るるを認めたる時など、この花があると、どれだけ風情を添へるか分からない。そこで、一枝を折つて、寂寞に惱む人に贈らうと思ふが、東風漸く急にして、花が散りかかつて居るから、どうにも仕方がない。

【餘論】この詩の前聯は、前に見えた、次韻西園公詠梅の第一首、春後春前曾獨探、江南江北每相思と唯だ一字を異にするだけであるし、結二句は、同首の擬折贈君供寂寞、東風無那欲殘時と唯だ二字を異にするだけで、全篇の半は、複出である。

招得清魂句自工。　清魂を招き得て、句、自ら工なり、
長洲春到雪波融。　長洲、春到つて、雪波融なり。
未逢人寄千山外。　未だ人に逢うて寄せず、千山の外、
忽訝君來一夜中。　忽ち君の來るを訝る、一夜の中。
縱隱荒榛猶的皪。　縱ひ荒榛に隱るるも、猶ほ的皪、
若穿深竹更玲瓏。　若し深竹を穿たば、更に玲瓏。
酒空客去愁多處。　酒空しく、客去つて、愁多き處、
蔌蔌繁霜嫋嫋風。　蔌蔌の繁霜、嫋嫋の風。

【詩意】梅花の清魂を招き得て、句も自然工妙、折から、春は長洲苑外に至り、雪を翻す樣な波も、漸く平かになつた。この花を折つて、遠く寄せやうと思ふが、その人は、千山の外に在るが故に、まだ寄せない。梅花の影が窓に映ると、さながら、一夜の中に、わが思ふ人が態態來て呉れた樣な氣がする。梅花の光明瑩徹なる、たとひ、荒れた藪の中に在つても、猶ほ的皪として輝くべく、若し深竹の奧に在れば、一そう玲瓏として見えるであらう。やがて、酒は盡き、客は去り、滿胸の愁いや増す處、霜はざくざくと音をなし、風は嫋嫋として吹き度り、淒涼滿目、殆んど堪へられない。

【字解】【一】清魂　梅花の魂。【二】雪波融　沫を散じて雪の如き波、融はとける。波平かなる貌。【三】荒榛　荒れた榛荊、即ち藪。【四】的皪　光り輝く貌、劉叉の詩に鑑鑑氷有レ韻、的皪玉無レ瑕とある。【五】蔌　ざくざくと聲する、前に梅花九首の其八に見ゆ。

【餘論】前聯は、梅花九首、其九の前聯、不共人言唯獨笑、忽疑君到正相思と語意やや近似し、結末二句は、其八の結、枝頭誰見花驚處、嫋嫋微風蔌蔌霜と用字が重複して居る。

莫學新妝入漢宮。　新妝を學んで、漢宮に入る莫れ、
春風多處易枝空。　春風多き處、枝、空なり易し。
遙尋尚憶僧房裏。　遙に尋ねて尚ほ憶ふ、僧房の裏、
忽見偏憐客路中。　忽ち見て偏に憐む、客路の中。
淡月微雲應萬樹。　淡月微雲、應に萬樹なるべし、
荒山流水只孤叢。　荒山流水、只だ孤叢。
夢回一笑仙人遠。　夢回つて、一笑、仙人遠く、
碧海青天沒斷鴻。　碧海青天、斷鴻を沒す。

【詩意】梅花は、新妝を學んで、見事に咲き出でても漢宮に入らぬが善いので、春風多き處、梅花妝

【字解】【一】學新妝　前に梅花九首、其九の詩中に引いたが、金陵志に「宋の武帝の女、壽陽公主、人日、含章殿の簷下に臥す、梅花、額上に落ち、五出の花を爲し、これを拂へども去らず、二日を經、これを洗へば、乃ち落つ、宮女、これに效ひ、今に梅花妝と稱す」とあるを轉用したのであらう。【二】漢宮　上の事は宋宮であるが、必ずしも、黏帶せず、漢の字は、唯だ添へたのである。【三】碧海青天　李商隱の詩に嫦娥應悔竊靈藥、碧海青天夜夜心とある。【四】斷鴻　李涉の詩に背飛斷班馬、分洲沒斷鴻とある。

を爲すなどいつて、その花を毮り取り、やがて、枝に何もない樣に成つて仕舞ふであらう。そこで、梅花を尋ねて、はるばる出かけたが、最後に僧房の中は如何かと思ひ、偶然、邂逅した處が、客路の中であるが故に、哀れは愈よ深い。淡月微雲の景色は、萬株林を成せる處であらうし、荒山流水の畔に孤叢を認めるのは、なかなかに趣がある。その梅花の下に眠つた處が、夢醒めて一笑すれば、仙人すでに遠く、その跡、杳然、碧海青天の間に、斷鴻の影の見えなくなつたと同じである。

【餘論】 遙尋は、金檀注に遙情に作つてあるが、これは、大全集に從つたのである。後聯は、梅花九首、其三の後聯、淡月微雲皆似夢、空山流水獨成愁に類似し、且つ彼に及ばぬ樣である。結二句は、趙師雄が羅浮に於て仙女を夢みたことを暗用し、融化の極、いささか新警である。

送梅侯赴錢塘

梅侯の錢塘に赴くを送る

(一)一鶴隨車到郡朝。　一鶴、車に隨つて郡朝に到る、

(二)剩山殘水尙蕭條。　剩山殘水、尙ほ蕭條。

盌藏秋塚(三)金方出。　盌は秋塚に藏して、金、方に出で、

(四)箭插寒沙鐵未銷。　箭は寒沙に插んで、鐵、未だ銷えず。

重見花開非舊賞。　重ねて、花の開くを見るも、舊賞に非ず、

初聞(五)麥秀是新謠。　初めて、麥秀を聞く、是れ新謠。

(六)幾時南作諸侯客。　幾時か、南、諸侯の客となり、

釃酒(七)江亭看晩潮。　酒を江亭に釃いで、晩潮を看む。

【字解】【一】一鶴隨車 宋史趙抃傳に「神宗曰く、聞く、卿、匹馬蜀に入り、一琴一鶴を以て自ら隨ふと。政を爲すこと簡易、亦た是に稱ふか」とある。【二】剩山殘水 戰後の江山、杜甫の詩に剩水滄江破 殘山碣石開とある。【三】金方出 杜甫の詩に昔日玉魚蒙葬地、早時金盌出人間とあるに本づく。この句は、楊璉眞伽が宋の六陵を發いたことを指したので、その詳は、前に卷九、穆陵行に見えて居る。【四】箭插寒沙 錢塘遺事に「錢王、潮を射るの後、亭を作り、鐵箭を鑄る、大さ杵の如く、亭中に埋む、土を出づること猶ほ七尺ばかり、箭亭と名づけ、以て鎭壓を示す」とある。【五】麥秀 史記に「箕子、周に朝せむとし、故の殷の墟を過ぐ。宮室、毀壞して禾黍を生ずるに感じ、箕子、これを傷み、哭せむと欲すれば不可、泣かむと欲すれば、その婦人に近きが爲に、乃ち麥秀の歌を作り、以て之を歌詠して曰く、麥秀漸漸兮、禾黍油油、彼狡童不與我好兮、と。謂はゆる狡童は紂なり、殷民、皆これを聞いて流涕すと云ふ」とある。【六】幾時 何時に同じ。【七】江亭 即ち箭亭、上に見ゆ。

【題義】 說明に及ばぬ。侯は尊稱、君といふに同じ。

【詩意】 一羽の鶴が車に隨つて、郡の役所に到著した。眺めやれば、戰後の山河は、尙ほ蕭條として、目もあてられぬ景色。秋塚に藏せられた金盌は、いつしか、發掘せられて、土中より出で、箭は寒沙に插んだ儘、その鐵は、依然として殘つて居る。重ねて、花の開くを見るも、むかしの如く游賞する氣には成らず、はじめて麥秀の歌の如き新しき民謠を聞いて、感慨いや增すを覺える。われも亦た、何の時か、南して諸侯の客となり、そして、酒を江亭に灑いで、音に聞く潮を觀たいものである。

送廣陵成居竹先生之雲間

廣陵の成居竹先生の雲間に之くを送る

老別蕪城每自哀。　老いて、蕪城に別れ、每に自ら哀しむ、
移家新向讀書堆。　家を移して、新に向ふ讀書堆。
遠人嶺表求詩去。　遠人、嶺表、詩を求めて去り、
故友京華寄字來。　故友、京華、字を寄せて來る。
亂後識翁嗟已晚。　亂後、翁を識る、嗟す已に晚し、
衆中憐我愧非才。　衆中憐む、我が非才を愧づるを。
建安大曆遺風遠。　建安大曆、遺風遠く、
尙藉捶鉤一挽回。　尙ほ捶鉤を藉りて一たび挽回。

【字解】〔一〕蕪城　一統志に、「揚州は蕪城、古しへの邗溝城、吳王濞の故都、鮑照に蕪城賦あり」と見ゆ。〔二〕讀書堆　前に卷十、送張偉之詩に見ゆ。松江府志に「亭林寶雲寺の後に在り、即ち顧野王、輿地志を修する處」とある。〔三〕嶺表　即ち嶺南。〔四〕建安　漢の獻帝の年號、魏の文帝の典論に「今の文人、魯國の孔融文擧、廣陵の陳琳孔璋、山陽の王粲仲宣、北海の徐幹偉長、陳留の阮瑀元瑜、汝南の應瑒德璉、東平の劉楨公幹、この七子は、咸な以て自ら驥騄を千里に騁せ、仰いで足を齊しうして竝に馳す」とある。〔五〕大曆　唐の代宗の年號、唐書盧綸傳に「綸、吉中孚・韓翃・錢起・司空曙・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審・李端と皆詩を能くし、名を齊しうして、大曆の十才子と號す」とある。〔六〕捶鉤　淮南子に「捶鉤するもの、年八十にして鉤芒を失はず」とあり、杜甫の詩に「應に手看て捶鉤を」とある、曲れるを敲き直す。

【題意】廣陵は揚州、雲間は松江、成居竹は題下の原注に「字は元章、詩人なり」とあるだけで、その詳は、分からない。この詩は、廣陵の成居竹といふ人の松江に赴くを送つて作つたのである。

【詩意】老いて故國の蕪城に別れるのは、むかしから、每每哀しいこととしてあるが、君は、今、こより家を移して、讀書堆の稱ある彼の松江に向はれるのである。君の名は、廣く世に知られて居る處から、嶺南の遠人は、態態詩を求め、京華の故友は、手紙を寄せて、各〻君と交を結んで居る。亂後に於て、はじめて翁の面を知りしは、遺憾ながら、すでに遲く、衆中に於て、わが獨り非才を愧ぢて居るのを憐んで、引き立てて下さつたのは、まことに辱い。顧みれば、建安大曆の遺風は、すでに遠くして、刻下、詩風、漸く頽靡に赴く折から、君の力に依りて、これを敲き直し、是非、一たびは、衰運を挽回して貰ひたいものである。

送陳博士歸南海葬親

陳博士の南海に歸りて親を葬るを送る

朝來泣罷廣州書。　朝來泣いて罷む廣州の書、
別我將行萬里餘。　われに別れて將に行かむとす、萬里の餘。
親骨未歸新冢葬。　親骨未だ歸せず、新冢の葬、
僕情猶守故坊居。　僕情、猶ほ守る故坊の居。

【字解】〔一〕廣州書　廣州に歸葬する旨を報ぜし手紙。〔二〕僕情　家僕の心情。

月明檣轉隨烏鳥。　月は明かに、檣は轉じて烏鳥に隨ひ、

雨暗燈移避鰐魚。　雨は暗く、燈は移つて鰐魚を避く。

此去定知難重見。　此を去つて、定めて知る重ねて見難きを。

海天南望渺愁予。　海天南望、渺として予を愁へしむ。

【題義】陳博士は、名字不詳。博士といへば、府學の敎授。南海は縣名、廣州府に屬して居る。この詩は、陳博士が、その故鄕南海縣に歸つて亡親を葬るを送つたのである。

【詩意】朝來、泣きながら、廣州に歸葬せらるる旨を報せられし御手紙を拜讀し、私と別れて、萬里に餘る旅路に上られる。なる程、御親父の遺骨は、未だ新塚に葬らずにあつたから、ここに至るも、止むを得ぬことであるが、家僕は、從來の坊居を守つて、御歸りを待つて居るといふ話。月の明かなる夜、帆檣は、烏に隨つて轉じ、雨の暗き夕、鰐魚の來襲を避ける爲に燈火を他に移すといふので、南方の旅は、なかなか困難である。君が此より立ち去られれば、再び御目にかかることも六つかしいので、南、海天相連る處を望めば、渺茫として際涯なく、方に予を愁へしめるばかりである。

送題上人還天平山　顥上人の天平山に還るを送る

古寺秋深乞食回。　古寺、秋は深く、食を乞うて回る、

尋鐘遙入亂雲堆。　鐘を尋ねて、遙に入る亂雲の堆。

猿知夜定啼應歇。　猿は夜定を知つて、啼いて應に歇むべく、

鷲聽朝談到不猜。　鷲は朝談を聽いて、到つて猜まず。

對日衲衣連葉補。　日に對するの衲衣、葉を連ねて補ひ、

盛囊詩句向僧裁。　囊に盛るの詩句は、僧に向つて裁す。

他時半偈重相問。　他時、半偈、重ねて相問ふ、

林閣應開候我來。　林閣、應に開いて我が來るを候すなるべし。

【字解】【一】乞食　托鉢する。【二】夜定　夜、入定する。【三】鷲聽朝談　前に卷十四、送石上人の詩中に引いたが、兩京志に「淨影寺僧慧遠、一鷲を養ふ、講經を聞く毎に、堂に入つて伏聽す、若し他事を說かば、鳴翔して去る」とある。【四】對日衲衣　日に晒らす僧衣。【五】半偈　詩をいふ。

【題義】說明に及ばぬ。顥上人は名字不詳。天平山は、前に卷五に見えて居た。

【詩意】古寺秋深き頃、終日托鉢して歸らむとし、鐘の鳴る處を目あてとして、遙に、亂雲の堆中に入つて、とぼとぼと歩んで來る。猿は、上人の夜入定するを知つて、今まで啼いて居たのも歇めるであらうし、鷲は、朝の法談を聞かうとして、遲疑せずに遣つて來る。日に曬らした僧衣の破れた處は、落葉を連ねて補ひ、囊中の詩句は、僧に對して剪裁したものである。他時、詩を寄せて重ねて問うた

ならば、わが爲に、林中の殿閣を開いて、來訪するのを待つて呉れるであらう。

張思廉退居江上

張思廉、江上に退居す

東望歸鴻江水邊。(一)
客愁應獨上樓眠。
春陰半月瀟瀟雨。
晩色孤村渺渺煙。(二)
君去尚存酬國劍。
我來未覓載家船。(三)
舊游莫問長洲苑。(四)
寂寞鶯花正可憐。(五)

東、歸鴻を望む江水の邊、
客愁、應に獨り樓に上つて眠るなるべし。
春陰半月、瀟瀟の雨、
晩色孤村、渺渺の煙。
君去つて、尚ほ存す國に酬ゆるの劍、
われ來つて、未だ覓めず家を載するの船。
舊游問ふ莫れ、長洲苑、
寂寞鶯花、正に憐むべし。

【字解】【一】江水邊　江は無論揚子江。【二】晩色　日暮の景色。【三】載家船　家屬を載せる船。【四】長洲苑　前に卷五に見ゆ。【五】鶯花　春景色。

【題義】この詩は、張思廉といふ人が江邊に退居したのに寄せたのである。思廉の字並に閲歷等は不詳。

【詩意】かへり行く雁の、東、江水の邊に落つるを見て、君の事を思ひ出したが、今頃、君は、客愁に堪へず、獨り樓に上つて眠つて居るであらう。春の花ぐもりは、半月の久しきに亙りて、時に雨瀟瀟として降り出で、孤村は、晩色を帶びて、渺渺たる煙に閉ぢこめられて居る。君は、ここを去つて、なほ國に酬ゆるの劍だけを殘し、われ往いて訪はむと欲するも、全家を乘せる樣な船が見つからぬから仕方がない。舊游の跡をしのんで、長洲苑、今は如何と問ふにも及ばないので、君去りし後は、さしもの鶯花、寂寞として、まことに氣の毒な程である。

過張子宜林居

張子宜の林居を過ぐ

清和池館閉閒苔。(一)
輕幰尋幽觸雨來。(二)
井桁水聲繩乍轉。
牀屏山色畫初開。
穿花百舌深緘口。(三)(四)
吹絮雙鱗淺露腮。(五)(六)

清和の池館、閒苔に閉す、
輕幰、幽を尋ねて雨に觸れて來る。
井桁の水聲、繩、乍ち轉じ、
牀屏の山色、畫、初めて開く。
花を穿つの百舌、深く口を緘し、
絮を吹くの雙鱗、淺く腮を露はす。

【字解】【一】清和　陰曆四月、何遜の詩に滲氣始清和とあり、司馬光の詩に四月清和雨乍晴とあり、陸游の詩に清和如夏初とある。【二】輕幰　幰は車中に垂れた幕、潘岳の籍田賦に微風生于輕幰兮とある。【三】百舌　鳥の名、もずともいふが、實はつぐみ、一名反舌、禮記の月令に「反舌、聲なし」とあり、淮

好賦一詩題壁去。好し、一詩を賦して壁に題して去る、

主人未肯便塵埃。主人、未だ肯て便ち塵埃とせず。

南子說山訓に「人、多言するものあり、猶ほ百舌の聲のごとし」とあり、杜甫の詩に赤葉楓林百舌鳴、黃泥野岸天雞舞とあり、本草綱目に「百舌鳥、樹孔窟穴中に居り、狀、鴝鵒の如くして小、身略ぼ長く、灰黑色、微に斑點あり、喙、亦た尖つて黑し。行くときは頭を俯す、好んで蚯蚓を食ふ。立春の後、鳴囀して已まず、夏至の後は聲なし、十月の後、蔵蟄す、人、或は之を畜ふも、冬月は死す。この鳥は、陰鳥なり、能く舌を反して囀ず、又百鳥の聲の如し、故に百舌反舌と名づく。周書月令、芒種の後、十日反舌聲なし、これを陰息といふ」とある。【四】緘口　家語に「孔子、周廟を觀る、金人あり、その口を三緘す」とある。【五】雙鱗　二尾の魚。【六】露腮　腮はえら、あぎと。【七】塵埃　摭言に「王播、少にして孤貧、揚州木蘭院に客たり、後二紀、來つて、この邦を鎭す。さきの題字、すでに、碧紗、その上に幕す。播、詩を作つて日く、二十年來塵撲レ面、而今始得碧紗籠」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、子宜その人は不詳。

【詩意】四月清和、池館は開苔に閉された頃、車中に薄い幙を垂れて、幽處に尋ね入ると、雨がぽつぽつ降つて來た。井桁の近くに水の聲がして、釣瓶の繩は、忽ち轉じ、牀屛の間に山色遠く見えたのは、畫が開いてあつたのである。花底に穿ち入る百舌は、最早深く口を緘して聲なく、池中に柳絮を吹いて居る二尾の魚は、一寸ばかり腮を露はして居る。そこで、一詩を賦して、壁上に書かうと思ふが、主人は、定めて之を大切にして、塵埃の塗れるに任かす樣なことはあるまい。

林亭山寺漁樵共話圖　林亭山寺、漁樵共に話するの圖

（一）古澹亭臺絕（二）世音。古澹亭臺、世音を絕つ、

橋分（三）鳥道入雲林。橋は鳥道を分つて、雲林に入る。

溪流漲雨含春綠。溪流、雨を漲らして、春綠を含み、

柳色凝煙帶晚陰。柳色、煙を凝らして、晚陰を帶ぶ。

江接遙岑（四）青黛淺。江は遙岑に接して青黛淺く、

山藏古寺白雲深。山は古寺を藏して白雲深し。

應慙（五）擾擾塵中客。應に慙づべし、擾擾塵中の客、

誰識漁樵話裏心。誰か識らむ、漁樵話裏の心。

【字解】【一】古澹　古めかしくあつさりしたる。【二】世音　浮世の物の音。【三】鳥道　鳥が僅に通ふ程な極めて險阻なる路。【四】青黛　遠山の色青くして眉黛の如きを云ふ。【五】擾擾　さわがしき貌、亂りがはしき貌。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】古めかしくあつさりした亭臺は、浮世の物の音を絕つて、極めて靜に、橋は鳥道より分れて、別に路を通じ、自然雲林に入り、そして、亭臺に行かれる樣になつて居る。溪流は、雨に漲りて、水は、春の綠を含み、柳色は、煙に凝つて、晚陰を帶びて居る。江は遙山に接して、青黛の色極めて淺

く、山には古寺を藏して、白雲が深く立ちこめて居る。さわがしげに、俗塵の中を驅け廻はつて居る人は、この畫を見ると、愧ぢ入るに相違ないので、漁樵が話し合つて居る其心は、とても、彼等の領解するところではない。

【餘論】後聯は、例の敍景の佳語である。

赴京留別鄉舊　京に赴かむとして鄉舊に留別す

幾向江頭買去船(一)。　幾たびか、江頭に向つて去船を買ふ、
自嗟行計(二)日留連(三)。　自ら嗟す、行計、日に留連。
風流已遂明時志。　風流、すでに遂ぐ明時の志、
歳月空驚壯士年。　歳月、空しく驚かす壯士の年。
(四)捧檄敢期囊穎(五)出。　檄を捧げて、敢て期せむや囊穎の出づるを、
著鞭肯向驛程先。　鞭を著くる、肯て驛程に向つて先んぜむや。
(六)東華叨列仙班入。　東華、叨りに仙班に列して入る、
(七)五色雲中覲(八)九天。　五色雲中、九天に覲す。

【字解】【一】去船　行く船。【二】行計　旅行の日程。【三】留連　滯る。【四】捧檄　辭令を頂戴する。【五】囊穎出　前に卷十、遂楊蔡陽の詩中にも引いたが、史記平原君列傳に「毛遂曰く、臣、乃ち今日請ふ、囊中に處らむのみ。遂をして早く囊中に處らしむれば、乃ち脫穎して出でむ、特に其末見はるるのみに非ず」とある。【六】東華　宮門の名、前に卷七、睡覺の詩中に宋史地理志を引いて置いた。もと、宋の東京の宮門であるが、初め入る門なるに因つて、借用したのである。【七】五色雲中　李白の詩に五色雲中鵠、飛鳴天上來とあり、王建の詩に太平天子朝元日、五色雲車駕六龍とある。【八】覲九天　天子に拜謁する。

【題義】この詩は、青邱が徵されて史官となりしに因り、南京に赴かむとし、因つて、鄉里の故舊に留別したのである。

【詩意】幾たびか、江頭に出かけて、舟の約束をしたが、旅行の日程の兎角滯つて、おくれ勝ちなるは、嘆息すべきことである。これまでは、詩酒徵逐、專ら風流を事とし、明時を樂むといふ志を遂げたが、顧みれば、光陰人を待たず、壯士の齡、最早幾ばくもあらざるに驚く位である。辭令を頂戴しても、錐の囊中より穎脫して出でる樣な譯には行かず、驛程に向つても、眞先に鞭を著けて出發することも出來ずに居る。やがて、著京すれば、叨りに仙班に列して、東華門より參內し、五色の雲の棚引く間に於て、天子に拜謁することと成るであらう。

白鶴溪阻雨　白鶴溪、雨に阻まる

(一)漠漠(二)窮陰歳欲闌。　漠漠たる窮陰、歳、闌ならむと欲す、
却攜孤櫂別鄉關。　却つて、孤櫂を攜へて鄉關に別る。
雨添白鶴溪頭水。　雨は添ふ白鶴溪頭の水、

【字解】【一】漠漠　ぼんやりして際涯なき貌。【二】窮陰　歳末に近き冬の陰。【三】金陵　南京。【四】擾擾　さわがしき貌。【五】

雪變金陵道上山。雪は變ず、金陵道上の山。
自歎無心雲漫出。自ら歎ず、無心雲漫に出づ、
應嗟倦翮鳥知還。應に嗟すべし、倦翮、鳥還るを知るを。
浮生擾擾成何事。浮生擾擾、何事をか成す、
贏得星星兩鬢斑。贏ち得たり、星星兩鬢の斑なるを。

星星　點點と光る貌。

【題義】白鶴溪は、前に卷七にも見え、一統志に「常州府城の外に在り、南北運河に通じ、南に滆湖に入る」とあつて、その詩は、南京より歸る時、ここを過ぎた作であつたが、この首は、南京に赴く時、ここで雨に逢ひ、しばらく舟を留めた時に作つたのである。

【詩意】冬の寒げなる曇天に遇うて、年も將に盡きむとする折から、却つて、孤棹を攜へ、故鄉に別れて出發した。すると、雨が降つて來て、白鶴溪の水は增し、上流の方は雪であつて、南京へ行く途すがらの山の景色は、大分變つて來た。身は、無心の雲の漫に岫を出づるが如く、鳥が飛ぶに倦んで還るを知るに比して、歎息を免れない。この浮世に居りながら、さわがしげに立ち廻つて、何事を成すか、唯だ星星たる白髮を兩鬢に餘して、斑に成つて見えるだけである。

【餘論】後聯は、陶淵明の歸去來辭、雲無心而出岫、鳥倦飛而知還を翻用して、好個の一聯となしたので、まことに、點化に妙である。青邱の召に應じて南京に上つたのは、洪武二年の春二月であるのに、この詩の起句に、漠漠窮陰歲欲闌といふのは、全然、窮冬の景色で、太だ相稱はない。せめては、窮陰に似て居るといふのなら、未だしもであるが、どういふ譯か分からない。

送沈省郎赴武康縣丞
沈省郎の武康縣丞に赴くを送る

昨夜南風長綠荷。昨夜、南風、綠荷を長ず、
映君袍色渡溪波。君が袍色に映じて、溪波を渡る。
暫從蘭省辭宵直。しばらく蘭省より宵直を辭し、
又向松廳愛晝哦。又松廳に向つて晝哦を愛す。
投牒訟田來縣少。牒を投じ、田を訟へて、縣に來る少く、
披圖按地設邊多。圖を披き、地を按じて、邊を設くる多し。
孤城莫歎經殘廢。孤城歎ずる莫れ、殘廢を經たるを、
還得征輪免重科。還た征輪を得て重科を免る。

【字解】【一】闈省　尙書省を云ふ。【二】宵直　夜、宿直する。【三】松廳　庭上に松ある官舍、王龜齡の詩に親題一軸寄松廳とある。【四】投牒　牒は公文、ここでは訴狀。【五】征輪　亂稅。【六】重科　重い咎め。

【題義】武康は湖州府の屬縣。この詩は、尙書郎の沈某が中央政府より出でて、武康縣丞に赴任するのを送つたのである。

【詩意】昨夜、南風吹き至つて、蓮の葉は初めて長じ、君の著て居る官袍に映じて、溪波を渡らしめる。今まで、君は、蘭省に出仕して居たが、今度、そこに宿直することを辭し、これから赴任されたならば、松生ふる庭に面せる官舍に在つて、永き日、吟哦を事として居られるであらう。地は僻遠なれども、人民質朴にして治め易く、訴狀を差し出し、田地の爭ひをする爲に、縣の役所に出頭する樣な不心得の者も少いが、圖を披き、地勢を按じて、邊防の施設を怠つてはならぬ。縣城は、戰後荒廢したが、格別歎ずるに及ばず、人民は可なり富有で、租稅など、滯納しないから、重科に罹るものなどは居ない樣である。

送胡端任嶺南陽朔主簿　胡端の嶺南陽朔の主簿に任ずるを送る

孤舟應過五羊城。(一)　孤舟、應に過ぐべし五羊城、
新作微官治遠氓。(二)　新に微官と作つて、遠氓を治む。
(三)躑躅風前荒店酒。　躑躅風前、荒店の酒、
(四)鉤輈雨裏惡(五)溪程。　鉤輈雨裏、惡溪の程。
負薪每見歸村女。　薪を負うて、每に見る歸村の女、
操弩時逢出洞兵。　弩を操つて、時に逢ふ洞を出づるの兵。
此去知君非竄逐。　ここを去つて知る、君が竄逐に非ざるを、
不須臨別淚沾纓。　須ひず、別に臨んで、淚、纓を沾すを。

【字解】【一】五羊城　一統志に「五羊城は、即ち廣州府城、尉佗築く。初め、五仙人あり、羊に騎して此に至る、故に名づく」とある。【二】遠氓　氓は民。【三】躑躅　つつじ。【四】鉤輈　鷓鴣の鳴き聲、唐本草に「鷓鴣は、江南に生ず、形、母雞に似たり、鳴いて、鉤輈格磔といふ」とある。【五】惡溪　潮州に在る、唐書韓愈傳に「惡溪に鰐魚あり」と見ゆ。

【題義】主簿は縣令の屬僚。この詩は、胡端といふ人が嶺南なる陽朔の主簿となつて赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は、孤舟に乘じて五羊城を過ぐべく、新に微官を得て、遠方の民を治めるのは、容易な事ではあるまい。風前につつじ花咲く荒店に憩うて、酒を酌むこともあらうし、鷓鴣の鳴く雨の中に、惡谿を渡つて行かれるであらう。薪を負へるは、村に歸る女であるし、弩を手にせるは、洞から出て來た戍兵である。ここを去つて往かれる君は、何も竄逐された譯でもないから、別に臨んで、淚で冠纓を霑すにも及ばない。

客中述懷

客中述懷

故園生計日蹉跎。　故園の生計、日に蹉跎たり、
不レ覺青春客裏過。　覺えず、青春、客裏に過ぐるを。
(一)旅食自慙空二(二)舊橐一。　旅食、自ら慙づ舊橐空しきを、
朝衫誰爲換二(三)新羅一。　朝衫、誰か、爲に新羅に換ふ。
多レ愁未三必關二花事一。　愁多く、未だ必ずしも花事に關せず、
長醉原非レ困二(四)酒魔一。　長醉、原と酒魔に困むに非ず。
幾度欲レ歸歸未レ得。　幾度か、歸らむと欲して、歸る、未だ得ず、
(五)空彈二長鋏一和二高歌一。　空しく長鋏を彈じて高歌に和す。

【字解】【一】旅食　旅中に在つて活を爲す。【二】舊橐　もとから持つて居る旅囊。【三】新羅　新らしき羅衣。【四】酒魔　太平廣記に「元載、飲まず、鼻に氣を聞けば、すでに醉ふ。後、異人に遇ひ、鍼を以て其鼻尖を挑すれば、一小蟲を出す。曰く、これ酒魔なりと。この日、遂に一斗を飲む」とある。【五】空彈長鋏　前に卷八、兵後逢張孝廉の詩中にも引いたが、史記孟嘗君傳に「馮驩、その劍を彈じて、歌うて曰く、長鋏歸來乎食無レ魚」とある。

【題義】説明に及ばぬ。これは、在京中の作と見える。

【詩意】故園の生計は、日に増し難澁であらうが、われは、客裏に在つて、青春の過ぎ行くをも忘れて居る位。旅中に在つて活を爲し、持つて來た旅囊も段段からに成りかかり、誰が、予の爲に朝服を新しい羅衣に換へて呉れるか。愁多きも、必ずしも花事に關係しては居らぬし、長醉して醒めざるも、元と酒魔に困む爲でもなく、孤客の身は、花事以外に愁多く、又酒を飲まなくても、ぼうッとして、いつでも醉つた樣な氣分である。幾たびか、故鄕に歸らうと思つても、時節到來せぬ爲め、まだ歸ることが出來ず、むなしく高歌に和し、長鋏を彈じて居るのみである。

【餘論】後聯は、紆餘曲折の中に、自然の妙を見る佳語である。篇中、空の字複出。

重游二甘露寺一

重ねて甘露寺に游ぶ

曉色(一)蒼蒼宿雨收。　曉色蒼蒼、宿雨收まり、
倚レ天樓閣喜二重游一。　天に倚るの樓閣、重游を喜ぶ。
雲來雲去山如レ舊。　雲は來り雲は去つて、山は舊の如し、
潮落潮生江自流。　潮は落ち潮は生じて、江、自ら流る。
天上曾聞甘露降。　天上、かつて聞く甘露降るを、
庭中長見(二)雨花浮。　庭中、長く見る雨花の浮ぶを。
江山千古情無レ盡。　江山千古、情盡くるなし、

【字解】【一】蒼蒼　ぼんやりとして居る貌。【二】雨花　天より花を雨らす、維摩詰の室に花雨降りし故事を暗用す。

人往人還自白頭。　人は往き人は還つて、自ら白頭。

【題義】甘露寺は、前に卷十二にも見えて居たが、一統志に「鎭江府、北固山上に在り、吳の甘露中に建つ、因つて名づく。內に梁の武帝の書、天下第一江山の六字あり」と見えて居る。この詩は、前の五律とは、時を異にしたる再游の作であらう。

【詩意】曉色は蒼蒼として、降り續いた雨は初めて收まり、天に倚る樣な高い樓閣に再び登ることの出來たのは、まことに喜ばしい。雲は來り、雲は去り、その間に隱見する山は、すべて舊日の如く、潮は落ち、潮は生じて、大江は、自ら流れて居る。天上から甘露が降り注いだといふは、かつて聞いたことであるし、庭中には、いつでも、天花が浮んで居る。江山は、千古に亙つて、其情盡くるなきも、ここを往還する人の自然白頭を免れぬは、まことに情ない。

【餘論】江山の二字は、故意に疊用したのであるが、天の字、自の字の複出は、蓋し、作者の過失であらう。

送呂志學秀才入道

呂志學秀才の入道を送る

海風寒拂紫髯(一)煙。　海風、寒は拂ふ紫髯の煙、

初著黃冠(二)已稱便(三)。　初めて黃冠を著けて、すでに便と稱す。

篋裏竟抛(四)紅葉字。　篋裏、竟に抛つ紅葉の字、

燈前唯寫碧(五)苔篇。　燈前、唯だ寫す碧苔の篇。

客窓炊(六)黍同新夢。　客窓、黍を炊いで新夢を同し、

仙圃偸(七)桃記昔緣。　仙圃、桃を偸んで昔緣を記す。

亦欲盡將書(八)策棄。　亦た盡く書策を將て棄て、

山中依子學長(九)年。　山中、子に依つて、長年を學ばむと欲す。

【字解】【一】紫髯　吳志孫權傳の注に「張遼、吳の降人に問ふ、さきに、紫髯の將軍あり、長上短下、馬に便に、善く射る、これ誰か。曰く、これ孫會稽」とある。【二】黃冠　道士の冠。【三】稱便　よく似合ふ。【四】紅葉字　前に、御溝の詩中に引いたが、太平廣記に「唐の僖宗の時、于祐、御溝の中に於て一紅葉を拾ふ、詩を題す。祐、亦た一葉に題し、溝の上流に置く。宮女韓夫人、これを拾ふ。後、帝、宮女三千人を放つ。一歸祐、韓を娶つて禮を成す。各〻簡中に于て、紅葉を取つて相示す。乃ち宴を開いて曰く、予二人、媒人を謝すべし。韓氏曰く、一聯佳句隨流水、十載幽思滿素懷。今日却成鸞鳳友、方知紅葉是良媒」とある。【五】碧苔篇　李白の詩に屢〻題青苔篇」とある。【六】炊黍　前に卷十二、詠夢の詩中に引いたが、枕中記に「道士呂翁、神仙の術を得たり、邯鄲に游び、道中、少年盧生に遇ふ、囊中の枕を以て之に授く。生、枕して夢む。一生の榮辱、備さに歷、欠伸して寤む、黃粱、尙ほ未だ熟さざるなり」とある。【七】偸桃　前に卷十一、黃大癡天池石壁圖の詩中に引いたが、漢武故事に「東都、短人を獻ず、東方朔を召して至る。短人曰く、西王母、桃を種ゑ、三千年、一たび花を開き、三千年、一たび子を結ぶ、この見不良、すでに三たび過ぎて之を偸む」とある。【八】書策　書冊に同じ。【九】長年　長生不老。

【題義】呂志學は、北郭十友の一、前に春日懷十友の中にも見えて居る。列朝詩集に「呂敏、字は

志學、無錫の人、元、胡服を尙ぶ、唯だ道士、深衣幅巾を許す、志學、乃ち服を易へて道士となる」とある。この詩は、卽ち呂志學の道士に成つたのを送つたのである。

【詩意】海風、寒くして煙の如き紫髯を拂ふとき、君の風貌は、如何にも堂堂として居たが、この頃、道士の黃冠を戴いて、よく似合ふといつて居る。紅葉に書きつけた文字は、篋裏に抛つて、奇緣を全うすることを求めず、燈前、ただ碧苔の詩を寫して居る。黍を炊ぐ間に、客窓の夢、俄に醒め、さながら、盧生の如く、仙圃に桃を偸んで、昔緣を記することは、古しへの東方朔の樣である。されば、予も亦た書冊を抛ち棄て、山中に入つて、君と一緒に、長生不死の術を學びたいと思ふ。

送秦司訓海上省墓

秦司訓の海上に墓を省するを送る

亂離何處訪遺阡(一)。亂離、何の處にか遺阡を訪はむ、

暮雨東歸近海邊。暮雨、東歸、海邊に近し。

寂寂野棠(二)閒照墓。寂寂たる野棠、閒に墓を照し、

依依鄕樹遠迎船。依依たる鄕樹、遠く船を迎ふ。

門生(三)舊解題銘石。門生、舊と銘石に題するを解す、

縣令新能給祭田。縣令、新に能く祭田を給す。

此日誰無邱隴念(四)。この日、誰か邱隴の念なからむ、

送君還詠白華(五)篇。君を送つて、還た詠す白華の篇。

【字解】【一】遺阡　殘れる墓。【二】野棠　ぼけの類。【三】門生書解題銘石　皇甫湜の韓文公墓誌銘に「昌黎韓公、疾を以て吏部侍郞を免じ、湜に諭して曰く、死して能く我をして世に隨つて磨滅せざらしむるもの、惟だ子、以て囑と爲すと。その年薨す。孤昶、公の緒餘を奉じ、許に躡いで以て至る。乃ち哭して銘し、その墓に銘す」とあり、唐書韓愈傳に「愈の指授を得て、皆韓門弟子と稱す、その徒、李翺・李漢・皇甫湜の若し」とある。【四】邱隴念　墓を弔ふ心。【五】白華　束晳の補亡詩に「白華は、孝子の潔白なり」とある。

【題義】司訓は州學の敎授。この詩は、州學敎授秦某が、墓參の爲に、海邊なる故鄕に歸省するを送つたのである。

【詩意】方今亂離の世、何の處にか先塋を訪ふべき。しかし、君は暮雨を冒し、東の方、海邊に近い故鄕に、墓參の爲め歸省される。野棠の花は、寂寂として墓を照らし、鄕樹は依依として、遠くより君の船を迎へる。門生輩は、もとより文を撰して墓碣に銘することを心得て居るし、縣令は、近ごろ、祭田を寄附されたとのこと。お話を承はれば、誰でも、墓參の心を起さぬものはないので、君を送る序に、白華の古詩を朗詠することを禁じ得られぬ。

309
65

終